二人の魔法少女が異世界入り

ルシフェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
二人の魔法少女が異世界入り

【Ｎコード】
Ｎ８０７９Ｔ

【作者名】
ルシフェル

【あらすじ】
二人の魔法少女、高町なのはとフェイト・テスタロッサ。二人はジュエルシードの影響で異世界に飛ばされてしまう。
そこで出会った鈴木太久郎という青年。
この３人によって運命は大きく変わる。
魔法の無い世界、魔法を使わない世界。

そんな世界で魔法少女二人は何を思って動くのか。

平和な日常。
そんなときが二人に流れたらどうなるのか。
今始まります！

序章（プロローグ）（前書き）

どうもはじめましての方はじめまして
短編を読んでくださってた方々お久しぶりです、ルシフェルです

初の長編シリーズです
作品はなのは
まあ有名どころですよね

いちよう今回はプロローグなので短いです

ではどうぞ

序章（プロローグ）

人がいない街の中。
否、４人だけがその孤独な世界で動いていた。
そしてその内の二人が激しくぶつかり合っている。
それは光を発しながら戦っていた。

片（かた）や桜色の閃光。
片（かた）や金色の閃光。

その戦いを見たものは思わず見入ってしまうほどの激しくて、綺麗で、そして譲れない戦いなのであった。

桜色の閃光を発している少女は、栗色の髪を白いリボンで両サイドにまとめ、白いドレスのような恰好をしている。
一見どこかの学校の制服に見えるだろうが違うであろう。

その少女の名は『高町なのは』。明るく優しい性格で強い正義感を持つ私立聖祥大附属小学校３年生、歳にして９歳。
彼女は魔法少女をやっている。というのも別の世界からやってきた魔導師ユーノ・スクライアとちょっとした事件で出会い、それに協力する形でなのはも魔導師となったのだ。

そしてなのはの手には『レイジングハート』という、杖のような物が握られている。
これは『デバイス』と呼ばれる、魔法を使う為の補助道具なのだ。

金色の閃光を発している少女は、金髪を同じく両サイドにまとめており、黒いマントを羽織っている。それは死神にも見えるような漆黒、そしてなのはのとは違う形の杖が握られていた。
彼女の名は『フェイト・テスタロッサ』。ある目的の為に『ジュエルシード』という石を求めて、別の世界からやってきた魔導師。

フェイトの手には、さっきも出てきたの鎌のような形の黒い杖『バルディッシュ』が握られている。こちらもデバイスである。

そして二人が闘っている近くには、青い宝石のような石『ジュエルシード』が宙に佇んでいた。
『ジュエルシード』、「ロストロギア」の一種で、一つ一つが強大な「魔力」の結晶体で、周囲の生物が抱いた願望を叶える特性を持っている。
そしてそれは同時に高町なのはが「魔導師」となり、フェイト・テスタロッサ達と出会うきっかけとなったものでもある。

『ジュエルシード』は、二人の激突に反応して小さな鼓動を鳴らす。

そして、なのはとフェイトは闘いを中断して、『ジュエルシード』を封印しようとデバイスを突き出す。二人のデバイスは、『ジュエルシード』の前でぶつかり合った。

互いのデバイスにヒビが入った直後、『ジュエルシード』から強烈な光と魔力の衝撃が放たれた。なのはとフェイトは、衝撃を受け

て吹き飛ばされてしまう。
『ジュエルシード』に衝撃を与えた事で、小規模次元震が発生したのだ。
小規模次元震の影響で、空間に歪みが生じた。

それは、出逢いの物語。二人の少女と普通の青年が巡り逢いが、運命の始まり。

そうそれは唐突に、本人の意思とは関係なく――――

――――物語が始まる合図だった。

序章（プロローグ）（後書き）

読んでくださりありがとうございます

とりあえずまずは1話目

まあこれだけだとね…

次の2話目もすぐにあげますのでしばらくお待ちください

さて内容ですが今回二人はあらすじでもわかるように異世界に飛んでもらいます

まあそこで平和に過ごしてもらおうというのがテーマでして

戦闘を楽しみにしてる方ごめんなさい、たぶんないです（笑）

いや描写が書けないとかじゃなくて、単純にそういうシーンがないんですよね…

唯一の思いついている争いシーンが、スーパーの半額セールの競争とかですしｗｗｗ

なお、このプロローグは赤夜叉先生の作品『イメージ』のプロローグを参考にしております。

もちろん許可ももらっております。

あくまで参考はプロローグだけで次からはイメージと関係ないです。

『イメージ』は完結しておりますが、かなり面白いのでどうぞ読んでみてください

では感想、評価、質問、誤字脱字等よろしくお願いします

邂逅（エンカウンター）

ここはある街のあるアパート。
そしてそのアパートのある部屋。

そこには一人の男が居た。男の名は鈴木太久郎（すずきたくろう）。ありきたり名の高校生だ。

ただ能力は無能ではない。太久郎は一人暮らしをしているのだが、その理由がスポーツ推薦、具体的には野球が上手かった。
ある年、ある中学が優勝したのだがそこにたまたま補欠としていたのが幸いして田舎のある高校に推薦されたのであった。

そんな男でも休日はゆっくりしていた。詳しく言うなら漫画を読んでいた。
いくら野球少年と言えども、最近引越してきたばかりなので疲れているのである。

しかしその漫画も何回も読んでいるため、結局は飽きて放り投げてしまった。
ここにある漫画はすべて中学に買っていたもので、引越しのさいに持ってきたのだった。

「ん～、さすがにどれも見飽きたか……」

一人部屋で呟くと今度はベットに寝転がる（ダイブ）。

「はぁ、さすがに今日は疲れた……。平日にできなかった片付けしたからなぁ……」

太久郎は今日部屋に積んでいたダンボールを一気に片付けたのだった。

そのため夜にはドッと疲れが襲ってきた。何事もコツコツとだがこういうことは休日にしかできなかったようである。

だがそのおかげで部屋はかなり綺麗になっていた。

ダンボールの数も奥の方にあと数個残っているだけであった。

「さてまた明日から学校だしがんばるか。そのためにも休養だな」

と踏ん切りをつけた太久郎はベットに寝転んでた体勢から本格的に寝るようである。

しばらくベットでいると、本格的に眠くなってきた。

まぶたも重く、本当に寝ようとしていた時だった。

突如部屋全体に歪みが生じる。その瞬間は太久郎は眠くて気づかない。

だがそれも次の瞬間、太久郎の上に何かが落ちてきてその衝撃で目覚める。

「ごふぉっ！な……何が……」

先ほどの衝撃で一瞬死んだお祖父ちゃんが見えた太久郎。
だが自分の上にきた衝撃の正体を確かめるべく必死に顔をその方向に向ける。

そして太久郎は上に乗っているのを見ると目が点になり驚愕してしまった。

それもそのはずである。太久郎の上にはなんと女の子が二人も乗っていた。隣には砕けた石が一つ。

「なっ……」

太久郎の思考は一瞬にして停止してしまった。この状況に全くついていけてないようである。

「ん……」

栗色の髪の女の子が呻き声をあげると、やっと太久郎の思考が戻ってきた。ハッと気がつくとベットの上に立ち上がり今度は狼狽しだした。

「えっえっ、どういうこと！？何この子たち！！まさか親の隠し子！！？」

何かわけもわからないことを言い出したが、それも仕方ないことであろう。

突如、部屋に知らない人がいたら誰もが驚く。それが小学生くらいの女の子で、しかも二人。
意味がわからないのも当然で、太久郎の脳内も必死に考えていることだろう。

「ん……ここ……は？」

そうこうしているうちに、太久郎があまりにも騒ぎ立てるものだから栗色の髪の女の子は気がついた。
もう一人、金髪の少女は気を失ったままだ。

そしてここで太久郎と少女の目が合った。
今度は二人の時間が停止（ストップ）。固まってしまった。

最初に動き出したのは二回も停止してしまった太久郎だ。

「ど、どちら様で？」

動揺しながらも少女には不似合いな聞き方をするが、向こうも混乱しているので素直に返答してきた。

「私は『高町なのは』って言います……」

再びの静寂。
そして今度は栗色の髪の少女、なのはの番だった。

「えっと、あなたの名前は？あとここはどこなのでしょうか？」

いちよう年上の人であってか、丁寧な口調で質問していた。

「俺の名は『鈴木太久郎』って言うんだが……どうしてお二人さんはここにいるのかな？いちようここは俺の部屋なんだが？」

「にゃ！？そうだフェイトちゃん！」

と太久郎の自己紹介とともに、もう一人のことも言われて気がつくなのは。

横にいる金髪の少女、フェイトの顔を見るとホッと胸をなでおろしていた。

「フェイトちゃんもやっぱり一緒だったんだ」

「あのもう1度いいかな？なのはちゃんと……フェイトちゃんだったかな？二人はどこから来たんだい？」

安心しているなのはに質問を無視（スルー）された太久郎はもう一度問いかける。

「あっ、すみません。えっと私たちは海鳴市から来ました」

「（どこかの地方の町かな？）ああそうなんだ。……で二人はどうやって俺の部屋に入ってきたんだ？」

なのはの答えに頭の中で納得させ、そして次の質問は少し強調して言った。

そうここはアパートである。太久郎の部屋は二階に位置しているが、相手は女の子。

仮に梯子を使ったとしても窓や玄関には鍵がかかっている。普通に考えて入ることは不可能である。

もし彼女たちが犯罪（ピッキング）の技術があれば別であるが。

あとついでに言うのであれば不法侵入という犯罪もかねている。

「えっとですね……」

なのはは少し俯いて、渋っていたが、意を決して太久郎に告げた。

「たぶんですが私たちは海鳴市から飛ばされてきたんだと思います」

「はい？」

「あと……私魔法少女なんです」

太久郎本日三度目の脳内停止（フリーズ）であった。

（いやいや、さすがにありえないだろ！）

さすがに三度目で耐性がついたのか心の中で先の言葉を否定していた。

「じゃあ魔法少女って言う証拠は？」

「この『レイジングハート』です！」

なのははレイジングハートと呼んだ赤い石を前に出してきた。その石は全体にひびが入っていた。

「今は変身できないですけど。この『レイジングハート』で魔法少

女になれるんです」

『Ｓｏｒｒｙ、ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ』

「そんなことないよ。私が無茶したから……」

と今度はレイジングハートがしゃべりだした。

そして太久郎はと言うと、

「へぇー、変わった通信機だね。」

太久郎は全く信じていなかった。

「にやぁぁぁ、だから信じてくださいなの！」

「だって、現実に魔法なんて信じられるわけないだろ！変身もできないっていうし、どう信じろと言うんだよ！」

なのはが今度は叫んだ。それに反論する太久郎。

二人の意見は至極もっともなことであった。

しばらく二人は、口論していたが大きな声でしていたため隣の住人に壁をドンと叩かれた。

それを合図に二人は休戦となぜかお互い握手して二人はとりあえず寝た。

もちろんなのはとフェイトはベットで、太久郎はソファで。

フェイトは落ちてきた状態のままだったので太久郎が寝かしつけ

た。

実はフェイト口論が始まる前に気がついたのだが言い争いが始まって起きるに起きれぬ状況になってしまったのだ。

太久郎はフェイトの体勢を変えるために一度お姫様抱っこされた。そのときフェイトはドキドキしたのはここだけの話。なんでも暖かい感触だったそうだ。

こうして一日目の事件は幕を下ろした。

そして次の日から波乱の生活が始まるのだった。

邂逅（エンカウンター）（後書き）

2話目です

3人の出会い編ですね

とりあえず初めての出会いはこんな感じですね

太久郎は本当に一般人Aとかそんな人です

ちなみに太久郎はロリコンではありません

二人にムラムラするような人ではありませんよ？（笑）

てかもしロリコンだったら犯罪が起きてたかもしれませんねw

さてこの3人の出会いでどうなるのか

あとレイジングハートは今回英語ですが、次からは日本語になるかと思います

文法とか僕には合ってるかわからないので…

次回の投稿は1週間以内になると思います

それがいつになるかわかりませんが、超えもしないです

では感想、評価、質問、誤字脱字等よろしくお願いします

P．Sそういえば今日はなのはの八神はやての誕生日みたいですね

まあはやてはこの小説に出ませんがw

早朝（モーニング）

次の日の朝、太久郎は朝早く起きていた。
理由は簡単、学校があるからだ。今日は野球の朝練（あされん）がないためまだマシな方だった。

太久郎は一人で台所に居り、料理をしている。
といってもパンを三枚トースターで焼いているだけだが。
あと隣にはなぜか作ったばかりのチャーハンが置いてあった。

パンを焼いている間に太久郎は二人の少女を起こすことにした。

「……さてどうしたものか」

二人の少女、なのはとフェイトと呼ばれている少女。
この二人をどう起こすか太久郎は悩んでいた。太久郎は一人っ子であり、いまいち少女の起こし方が知らないようである。

大きな声を出して起こすという選択肢はどうやら思い浮かばなかったようだ。

「はぁ～、おはようございます」

気配を察知してか太久郎が考えている間になのはが起きだした。
なのはの隣に寝ていたフェイトも布団をもぞもぞとさせて起き上がった。何か話したようだが声は小さくて上手く聞き取れなかった。

「あっ、おはよう。ちょうど今起こそうと思っていたんだ。フェイトちゃんも今は混乱してるかもしれないけど、まずはご飯にしよう。食べながらでも説明するよ」

「えっ、えっと……」

「おはようフェイトちゃん。行こう」

「う、うん」

フェイトは少し戸惑っていたが、なのはと太久郎にせかされてついていった。

トーストもちょうど焼けて、皿に一枚一枚にそれぞれの分を乗っけていった。

「ごめんな、トーストで。もしかして朝食はしっかりとる家庭だったりする？」

「いえ、大丈夫です。泊らしてもらって、さらに朝食まで作ってもらったんですから」

「私も大丈夫です」

「いや、さすがにあの状況で小さな女の子を外に出すわけにもいかなかったからね。こんな朝食で悪いけど、どうぞ」

太久郎はそんなたわいない会話をしながら笑みを浮かべていた。

「ではいただきます」

朝食の準備を終え太久郎が食べる時のおなじみの挨拶を言うと、なのはやフェイトもパンをかじって食べ始めた。

食べ始めると昨日の出来事をフェイトにも話をした。
フェイトは聞きながら小さくうなづいていた。

（あまり話さない子だなぁ……。警戒でもしているのかな？）

太久郎は話しながら、フェイトの様子をうかがっていた。

なのはは昨日の一件である程度性格や素性はわかったが、フェイトに関しては今日が実質初対面である。

昨日は寝ていて話す機会がなかったため、太久郎は今日たくさん話そうと密かに決意していた。
だがなのはとは違い口数が少なく感情が思ったより見えないので少し話かけづらくなってしまっていた。

そう思案している間に、なのはの家族のことに話題が変わっていた。

「私のところは両親とお兄ちゃんとお姉ちゃんの家族五人家族なの。それでケーキ屋を営んでいるんです」

「へぇー、ケーキ屋か。俺のとこの親は、普通にサラリーマンだか

らな。兄弟とかもいないし。なのはちゃんの家が羨ましいよ」

「そんなことないですよ」

なのはの家族や仕事などを聞いて太久郎が羨ましがる。それを聞いたなのは照れていた。

一区切りすると、今度はフェイトの方向を向いて太久郎は聞いた。

「フェイトちゃんのところは？」

「えっと、私のところはアルフとお母さん」

「アルフさんっていう人は兄弟か誰かかい？」

「使い魔です。」

正直太久郎はまたかと思った。

先ほどから魔法（ファンタジー）の言葉を聞いて苦笑していた。

昨日の夜になのはから魔法のことで言い争っていたが、いくらたっても平行線だった。そのため今日は『あくまで仮に』魔法があると仮定して聞いていた。

ここまで来ても信じないところを見ると結構頑固な性格なのかもしれない。

「じゃあお母さんは何をしているのかな？」

「えっと、それは……」

とフェイトは俯いて黙り込んでしまった。

「あっ、ごめん。悪いこと聞いちゃったかな？」

「いえ、大丈夫です。ただ言えないだけで……」

この時なのははもちろん、異世界の住人である太久郎はフェイトのことなど知るよしもなかったのである。

そのことが響いたのか空気が重くなり、三人とも話すのを止めてしまった。

それを挽回しようと、太久郎はもう一度二人に話しかける。

「そういえば、二人は同じ学校から来たのかな？友達同士？」

「あの……」

「敵です」

太久郎は昨日なのはからここへの経緯や魔法のこと（もちろん信じてないが）を聞いていたが、二人の関係については詳しく聞いていなかった。

その質問になのはは答えられずにいたが、予想外にフェイトがしっかりとした口調で告げた。何かを決意しているように。

それに少し驚く太久郎だが、何かを掴んだようだった。

（なのはは仲良くなりたいのだろうけど、フェイトが否定しているわけか……）

確信はないが、なのはの昨日の様子。

そしてフェイトの先ほどの言葉、二人の関係をだいたい把握したようだ。

「……そうか。じゃあ、これからは二人は友達な」

「「え？」」

太久郎の言葉になのはとフェイトは目を丸くしてしまった。

特にフェイトは文句を返してきた。

「私たちは敵同士なんですよ？」

「そんなの関係ないよ」

太久郎ははっきりと言った。

「君たちの世界はそうだったかもしれない。けど、ここでは争う原因…ジュエルシードだっけ？それがないんだからお互い敵対する必要なんて全くないよ」

さっきなのはやフェイトの話を改めて聞いて一つわかったことがあった。

それはどうやらここはなのは達の世界とは違うらしい。確信はもてないが『海鳴市』というのを携帯の地図ででなかったため太久郎

はそうとりあえず判断した。

そしてここは異世界。ならばここにいる間だけでも仲良くやればいいじゃないか。あわよくば向こうの世界でも仲良くやっていけるかもしれない。

そう考えていた。

「あとはそうだな……。もし喧嘩したら1日食事抜き」

もちろん太久郎はそんなこと本気で考えていない。

だがこれくらい言っておいた方が子供は言うことを聞くだろうと太久郎は少なくとも思ったのである。

「うぅ……」

さすがにフェイトもこれには参ったようである。

対称的になのはは喜んでいた。どうやらなのはは本気でフェイトと仲良くなりたかったのだろう。

「よし、そうと決まれば握手。そして二人とも改めて自己紹介。あとお互い名前で呼ぼうか。あっ、俺のことも名前で呼んでいいぜ。年上関係なくさ」

そう言われてお互いに見つめ合う。

まず動き出したのはなのはだった。

なのははフェイトに向けて手を差し伸べる。

「私は高町なのは。なのはだよ。よろしくね、フェイトちゃん」

なのはの挨拶につられ、フェイトも恐る恐る手を握った。
「私、フェイト・テスタロッサ。よろしく、なのは」
そして二人は太久郎の方を見ると、
「よろくしお願いします、太久郎さん」「よろくしくお願いします」
「おう」
なのはは元気に、フェイトも恥ずかしながら言うと、太久郎は短く返事した。
自己紹介を終えると、太久郎やなのはは笑った。それも盛大に。
フェイトも心なしか少し微笑んでいた気がした。

そしてなのはは唐突に太久郎の方を向いて言った。それも太久郎にとって強烈な一言を。
「ところで太久郎さん。学校はいいんですか？」
「あっ……」
なのはに言われて気がつく太久郎。あわてて時計の方を見る。
時計を見ると8時22分だった。

ここから学校までそう遠くはないが、自転車でどうがんばっても１０分はかかる距離である。
そして学校の着席時間は８時３０分である。

つまり……

「……ああああ！！」

遅刻だった。

そこからの太久郎の行動は迅速だった。
急いで準備して、二人を気に留めないくらい急いで着替えて（二人はいちよう後ろを向いていた）、二人にこう言い残した。

「朝に作ったチャーハンがあるから、それを昼にレンジでチンして温めて食べといて。あとは……」

「あの後は大丈夫ですから急いで行ってください」

「ごめんね、行ってきます！」

「「行ってらっしゃ……」」

二人は言いきる前に太久郎は行ってしまい、ドアがバタンと閉まる音だけが響いた。

「嵐のようだったなの」

「うん」

こうして忙しい朝の時間は過ぎたのであった。

ちなみに太久郎が出ていったのは８時２５分だった。
わずか3分で準備を完成させたのは素晴らしいが、遅刻は確定なのは間違いなかった。

その後太久郎が着いたのは８時３５分ごろで、太久郎は高校始まって初めて遅刻してしまったそうな。
もちろん太久郎は先生に出席簿の角で叩かれていた。

早朝（モーニング）（後書き）

3話目です

一夜明けての朝の出来事ですね

主に状況整理

そしてなのはとフェイト、太久郎の友達化計画

果たしてこれでなのはとフェイトは本当に良くなるのでしょうかね？

まあそれはまた次回で

次回の投稿も1週間以内になると思います

それがいつになるかわかりませんが、超えもしないです

では感想、評価、質問、誤字脱字等よろしくお願いします

友達（フレンズ）

「くっそ、まさか遅刻してしまうとは……」

1時間目の授業が終わったあとの休み時間。太久郎はぼやいていた。

「はっ、まあこれで今日は玉拾い確定だな」

隣で笑ったのは篠寺幸星（しのでらこうせい）。太久郎と同じクラスで同じ野球部の友達。

野球をやってるとは思えないくらいすらっとしていて、顔立ちも太久郎と比べてかっこいい部類だろう。隣の席なのでよく話す一番の友達。

「一応野球部の決まりだからな」

「ふふふ、しっかりと働きなさいよ」

逆隣でちょっと意地悪な笑みを浮かべてるのは篠寺美幸（しのでら みゆき）。

苗字でわかるとおり美幸と幸星は姉弟で、いちようこちらが姉。姉と弟は双子ではないが同学年らしい。

こちらも弟と同じくなかなかの美人で、黒のロング。どこがとは言わないが、あそこもなかなか膨らみがあった。

美幸は野球部のマネージャーをやっており、見かけによらず野球に関しては熱血的。

「はいはい、わかってますよ」

と美幸の言葉を軽く受け流す。

この学校の野球部は遅刻やテストで赤点を取ったりすると、自動的に玉拾いをさせられる。

グローブは持たしてもらえるが、バットはお預け状態になる。

平和な日常。そんな一コマを抜き出したかのような休み時間である。

ふと、太久郎は少し窓の外に目を向ける。太久郎には一つ心配事があった。

なのはとフェイトである。

（二人は大丈夫かなぁ……）

いちよう最後に仲良くするようにとは言っておいたがやはり心配なものは心配だった。

それは親心か、それとも兄心か。

太久郎は家の方を見つめていた。

一方なのはとフェイト。
二人は向き合ってなぜか正座をしていた。特に正座していることに意味はない。
ただ二人の間に静寂が流れる。
なぜこうなったかというと太久郎を見送った二人は――――――

――――――究極に暇だった。
いちようここは居候している家で何が置いてるのかわからない。
漫画は本棚に置いてあるが二人で遊べない。
外で遊ぼうにも二人はこの世界の住人ではない。なので遊べる場所がわからないのである。

最終的になのははフェイトに話しかけるが、
「えっと、好きな食べ物は？」
「特にない」
こうであった。
なのはは何か盛り上げようと、友達同士の会話ではないと思いつつも、その質問はフェイトにばっさりと切られてしまった。
（やっぱり嫌われてるのかな……）

なのはは内心少し寂しかった。

（うぅ、どう返していいのか……）

一方フェイトも頭の中は混乱していた。

フェイトはこうやって「友達」と向かい合って、ましてや二人きりで話したことがないのである。

そのため友達（なのは）を前にして頭が回らず、返事もそっけないものになってしまっていたのだ。

二人の会話は上手く盛り上がらず、1時間の時がすぎてしまっていた。

「も、もう無理」

となのははこの空間に耐え切れなくなり机に突っ伏してしまった。

フェイトも仰向けに寝転がってしまった。

何もしていないのに、息をハアハアとさせている。それだけ神経を使ったのだろうか。

しばらくその状態だった二人だが、ふっとなのはは机の下に落ちていたテレビのリモコンを見つける。

机の下から取り出すと空気を変えるためかテレビをつける。

すると……

『ガアァァァ！！』

「「キャー！！」」

どこかのホラー映画のＣＭだったのであろう。ゾンビが画面上いっぱいに出て吠えていたのだ。

それにおもいっきり驚いた今はか弱く見える少女達（なのはとフェイト）。

二人は思わずお互いに抱きついてしまっていた。体はプルプルと震えている。

しばらくするとＣＭが終わってバラエティー番組が始まっていた。

そこで二人は改めて今の現状を見た。

驚いたとはいえ二人はほぼ同時に抱きついてしまったのである。

「「ふっ、あはははは」」

この状況に思わず笑ってしまう。

二人は先ほどのことを思い出して笑ってしまったのであろう。

「思わず抱きついちゃったね」

「うん、面白かった」

二人はそういうとお互い微笑んだ。

「私、お友達って感覚がよくわからないの。今まで友達っていなか

ったから……」

と頬を少し赤らめながらなのはに事の真意を告げる。

「そうだったんだ…。てっきり嫌われてるのかと思っちゃった。でもよかった」

そこでいったん区切り、息を吸い込みフェイトに言う。

「今度こそよろしくね、フェイトちゃん！」

「うん！」

なのはの言葉にフェイトも元気良く返事した。

そこから二人はＯＨＡＮＡＳＨＩ…ではなくお話をたくさんした。

なのはの友達、学校、ユーノ、アルフ、魔法を初めて使ったとき……

たくさん、たくさん、それも時を忘れてしまうくらい。

昼ごろもしフェイトのお腹の音が鳴らなかったら、そのまま太久郎が帰ってくるまで話続けていたかもしれない。

グーと鳴ってしまったフェイトは頬を赤らめていた。

「ふ～、何とか焼きそばパンゲットだぜ」

ところ戻って。太久郎は某有名アニメの台詞っぽいことを言いながら机に座っていた。

今は学校の昼食兼昼休みの時間。太久郎、幸星そして美幸、この3人が教室で食事していた。

太久郎は先ほどの言葉でわかる通り、学校でパンを買ってきた。美幸と幸星姉弟は姉が作った弁当を食べている。

美幸曰く、「いちょう野球選手なんだから健康管理は必要でしょ」とのことだった。

（本当野球のこととなると人が変わるよな）

もちろん心の中で思っているが、口には出さない。言うともれなく美幸のお説教が付いてくるからだ。

（なのはとフェイトは今頃何してるだろうか。さすがにもう昼食は食べ終えているよな）

太久郎は休み時間の度にこの二人のことを考えていた。

よほど心配なのか時々上の空にまでなっていた。

（俺のチャーハン口に合えばいいけど……）

太久郎は決して料理ができないというわけではない。

チャーハン含めた、焼きそばなどの簡単な料理ならば一応作ることができる。

味も突出しておいしいわけではないが、ある程度のおいしさ――――普通のおいしさ――――ならば作れた。

こういうのを見ると太久郎の性格が窺える。

「タク、食べたなら外に遊びに行こうぜ」

「ああすぐ行く」

幸星は昼食を食べ終わりグランドに出かけた。

太久郎も食べかけのパンを口に放り込むと教室を出る。

そのとき美幸は行儀が悪いとか言っていたが無視して出ていった。

（……今日は急いで帰ろうかな）

常に彼女達（なのはとフェイト）のことを念頭に置きながら。

友達（フレンズ）（後書き）

４話目です

太久郎の周り

あと朝とは違ってなのはとフェイトが友達に本当の友達になれた瞬間です

自分は友達ってなろうって思ってなったものじゃなくて、自然になるようなものだと思ったんですけどどうですかね？

あとオリキャラが２人出ましたが、そんなに多くでることもないと思いますｗ

次回の投稿は…１週間以内ではきついかもしれません

まあ１週間ギリギリを目指しますｗ

では感想、評価、質問、誤字脱字等よろしくお願いします

外出（ショッピング）（前書き）

ある意味サービス回ですｗ

外出（ショッピング）

「ただいまー」

「「お帰りなさい」」

時刻は夕方の5時半頃。

太久郎は家に帰ってきた。それになのはとフェイトが出迎える。

「ちゃんと仲良くしてたか？」

「はい」

「ちゃんとしてましたよ」

太久郎の言葉に二人は返事をする。

確かに太久郎の目から見ても朝とは違い、凄く良い雰囲気になっていた。

今日一日で何があったのだろうか？と疑問を持つが、それは後で聞くとして今は流した。

「帰ってきて早速なんだけどさ。一緒に買い物についてきてくれないかな？」

「買い物ですか？」

「私達も一緒に？」

太久郎は買い物に行くと言い出す。
なんでも食料があまりないらしい。
確かに少女とはいえ1人から3人に増えたのだから必要な食事の量も増えるのも道理である。
「すみません、私たちのせいで……」
「気にしなくてもいいよ。一人暮らしで寂しかったなぁって思ってたところだったからさ」
負い目を感じる二人に太久郎はすかさずフォローを入れる。
そしてあともう一つとつけくわえる。
「なのはちゃん達の服を買いに行きたいんだ」
実際今日買い物行きたい理由はこちらが本命であった。
さすがに女の子に毎日同じ服を着せるわけにはいかないと思ったのである。
それに大いに賛成の二人なのだが、なのはがでもと少し躊躇(ためら)うように言う。
「でも結構服って高いですよ？」
そう問題はそこである。
太久郎は財布に多めにお金を入れているが、如何(いかん)せんまだ高校生

である。
親の仕送りでは少ないし、銀行から引き落とそうにも時間がない。
食料を含めると心細い額であった。
「お金なら私持ってますよ」
とフェイトが少し悩んでいた太久郎に言う。
それに少し呆気に取られるすぐにフェイトに聞く。
「どれだけ持っているんだい？」
フェイトは言うより見る方が早いとポケットに手を突っ込む。

もちろん太久郎はそんなに期待していない。
手を出して待っていると、それは大きく裏切られた。
かなり良い方向で。
「……」
太久郎の上にはテレビとかでしか見たことがないような札束が。
これにはなのはや太久郎は大きく目を開いていた。
「えっとフェイトさん、これはいったいなんぼくらいあるのですか？」

思わず敬語になってしまう太久郎。

「？たぶん１００万くらいあると思う」

「「えええぇ！！」」

フェイトがあっさり言うとそれに思わず絶叫の二人。

どうしてこんなに持っているのかと聞くと、なんでもフェイトは一人暮らしする時に親からポンと渡されたそうだ。

太久郎は心の中でどんな親だよと突っ込んでいたが、それと同時にお金の問題は無事に解決（クリア）した。

そしてフェイトのお金は太久郎が持っていくことにした。

さすがにこんな大金を子供に持たしてはおけないとのことらしいが、太久郎もまだ一応子供である。

もちろん優しい二人はそこには突っ込まないが。

「じゃあ、急いで出かけるか。早くしないと晩御飯とかも遅くなるしな」

そう告げると太久郎は扉を開ける。

それを見たなのはとフェイトは即座に準備を整え、家を出る。

そして三人は駅前のデパートに向かった。

太久郎のアパートから駅前のデパートまでは歩いて１０分ほどの距離にある。

学校とは逆の方向でデパートびしては小さいがここらへんでは一番大きい。

とりあえずデパートというだけのことはあり、ある程度なんでも揃っていた。

そう考えていると太久郎のアパートはかなり良い物件と言えるかもしれない。

太久郎達三人はそんなデパートに向けて歩き出しながら話しているとあっという間に着いていた。

デパートの玄関から中に入るとそこは別次元の空間に思えてくるのだった。

もちろんそんなことはないのだが、コンビニやスーパーと違い少し雰囲気が違うだけで、高揚感が違ってくる。

子供達もこの時ばかりは何か買ってくれるかもと想いを馳せている。

太久郎はそんな時期もあったなぁと物思いにふけている。

「太久郎さん、洋服売り場は3階みたいですよ」

「そうか。じゃあそこのエスカレーターで上に行くか」

しかし今の主人公はと呼べるのは間違いなくこの二人の少女であろう。

見るからになのははわくわくしているのがわかる。

そしてそうこうしているうちに3階にたどりつく。

ここはフロア全体が洋服売り場となっているようだった。

「フェイトちゃん、行こう」

「うん」

なのは達も3階に着いた途端に、駆け出して自分に似合う洋服を探しに行った。

異世界だの魔法だの言ってもやはり女の子なんだなと思った太久郎であった。

「さて、俺はどうするかな…と」

二人が洋服を探している間、太久郎はどうするか迷った。

さすがに女の子の洋服が大量にあるところに行くのは少し勇気がいるのだ。

そのため太久郎は店の入り口近くにいる。

「あっ、これとかフェイトちゃんに似合いそう」

「そうかな」

「うん、きっと似合うよ。太久郎さんもそう思いますよね」

「うん、可愛いと思うよ」

なのはが率先して選んでいると、一着フェイトに似合いそうなのを見つけた。

なのはと太久郎はフェイトに向かって似合ってると言うと、フェイトはあぅとか言いながら顔が赤くなっていた。

「一回試着しよう」

「う、うん」

「ほら太久郎さんも」

「え、いや俺はここで……」

「いいから！」

なのははフェイトと太久郎をに引き連れて、試着室に向かおうとする。

そのとき太久郎は少し嫌がったが、なのはに引っ張られたので仕

方なく着いていった。

「じゃあ、一緒に着替えよ」

「あの、バラバラで……」

「問答無用なの！」

なのは達はなぜか二人で入ると着替え始めた。

フェイトの方は無理やりな気がするが気のせいだと思う……。

「（フェイトって押しに弱いのかもな）さて、着替えている間に……」

とその場から離れようと立ち上がろうとしたそのとき、

ドンッ

「あっ……」

不意に後ろから小さな子供がぶつかってきて、前に倒れそうになる。

だがそれも何もしなければそのまま倒れるだろう。

しかしその倒れる先には

（うおおぉぉぉ、このままでは倒れて、二人の着替えをぉぉぉ！！）

すぐにそう直感した太久郎は反射的に試着室のカーテンを掴む。

「ふっ、たす…」

しかし、ビリッ、とカーテンのレールが重さに耐え切れず外れてしまった。

「ッ、て、いたた……」

と顔を強打してしまった。

それに思わず顔をあげるのだが、視界の先には漫画みたいに着替え中の少女がいた。

しかも二人分。

二人ともまだ小学生なので上の下着は着けていない。

二人はスカートを履きかけだったり、試着するための服を着ようとしていたところだった。

女の子の上の大事な部分は上手く隠れていて見えないが、他の部分の白い肌は多く見えていた。

つまり大公開（フルオープン）状態であった。

「ッ、……」

彼女達(なのはとフェイト)はこの状況に氷ついており、目には涙がうっすらと出ていた。

客観から見ると男なら羨ましい体験かもしれないが、実際体験する方はたまったものではない。

どちらも精神的ダメージがでかいのは明白だ。

「えっと……ゴメンナサイ」

「「キャアァァァ！！」」

そのときそのフロアに少女の声が響き渡った。

３０分後、３人はどうにか帰路についていた。

先に言うと太久郎に罪は一切なかった。

ぶつかってきた子供の証言や、なのはとフェイトがそのときは叫んだものの許してくれたからである。

荷物はなのは達が買った服以外はない。

さすがにあの状況から他の店に行く勇気はなかったようだ。

「本当にごめんな」

「い、いえ、あ、あの気にしてませんから」

太久郎は先ほどから何度も謝っており、その度に許してもらっているのだが、やはり彼女の顔は赤かった。

フェイトも顔を俯かしているが、ゆでたこのようになっていることだろう。

「でも楽しかったです」

「え？」

なのはの突然の言葉に太久郎は聞きなおしてしまう。

なのはは改めて口を開けて話す。

「私とフェイトちゃんと太久郎さんとの3人でお出かけ凄く楽しかったです」

それは彼女(なのは)の心からの気持ちだった。

「初めは見知らぬ世界に来て、他のみんなに会えないってわかって、凄く悲しかったですけど…。それでも太久郎さんの優しさに触れて、フェイトちゃんと友達になって、凄く嬉しいんです！」

それはとびっきりの笑顔だった。
裏には寂しさがあるかもしれないが、そんなことは些細なことと思えてくれるような綺麗な笑顔だった。

「あっ……」

太久郎も思わず見ほれてしまっていた。
隣のフェイトもとても良い笑顔になっていた。

「……、ありがとう」

太久郎は一度目を瞑ると小さく呟いた。

「じゃあ、急いで帰ろうか。晩飯の支度とかあるし」

「「はい」」

なのはとフェイトは頷くと、二人は太久郎の両サイドに別れた。

「あの……手をつないでもいいですか？」

「？ああ、いいよ」

太久郎がそっと手を差し伸べるとフェイトは優しく掴んできた。
なのはの方も負けじと、太久郎の手を掴む。

そして3人は夜の道を帰った。

３人の姿は仲の良い兄妹に見えた。

外出（ショッピング）（後書き）

５話目です

今回は…？？？「ちょっと待てー！」

なんだ太久郎か

太久郎「なんだじゃないよ、なんだよこれ！読みましたよ、今回の小説！酷いじゃないですか。なんで今回あんな事件起こしたんですか！」

ハハハ、やっちゃた

太久郎「『やっちゃた』じゃないですよ！これからなのはファン達に僕は恨まれますよ！」

ハッハッハァ

太久郎「『ハッハッハァ』！？なんでご機嫌なんすか！ここだけじゃないんですよ。最後の方でなんで僕惚れた感じになってるんですか！？」

ハハハ、やっちゃたＺＥ

太久郎「『やっちゃたＺＥ』じゃないですよ！なんでちょっとかっこいい言い方になってるんですか！？もうどうしてくれるんですか！僕殺されますよ！」

まあがんば（爆）

太久郎「（爆）ってなんですか、（爆）って！もうやってられるか！うわーーーん！」

おお、あいつが泣くとは珍しい
まああんなのはほっといて

今回は
これからの金問題
太久郎も指摘したあの事件（笑）
そしてなのはの今の気持ち

うん、まあ始めの方はおまけみたいなもんです
本当は最後がメインなんだけど…
どうしてこうなったｗｗｗ
真ん中の方力入れすぎ、ワロタ

しかし話も平坦じゃつまんないですもんね
こういうのもたまには入れないと

とりあえず、書いた本人がなんですが…

太久郎のあそこモゲロ

くっ、なのはとフェイトのはｄ…げふんげふん
とにかく見やがって

まあいいや、今回でいじれたしｗｗｗ

次回の投稿は1週間以内でがんばります
まあ前回の予告できついって言ってましたがいけましたし、大丈夫かと

では感想、評価、質問、誤字脱字等よろしくお願いします

P．S後書きの元ネタわかる人いますかね？

勝負（バトル）

家に無事着いた太久郎達御一行。
３人は晩御飯の用意をしていた。

「太久郎さん、用意できました」

「こちらもです」

先ほどの３人に起きた事件（ハプニング）でのわだかまりは今では消え、仲良く準備をしていた。

「おっし、じゃあ盛りつけたら完成だな」

盛りつけると言っても、作った焼きそばを皿に入れるだけなのだが、そんなことは気にしない。

「やはり焼きそばは手早くて楽だね。洗物も少なくてすむし」

なんとも主婦のような台詞だが、それも一人暮らしもしていたこともあるので納得いくだろう。

「では、「「いただきます」」」

３人に食べるときの挨拶をすませると食べ始めた。
食べ始めると今日の出来事を話した。

基本的には太久郎がなのは達の今日のことを聞いて、談笑していた。

「へぇー、そんなことがあったんだ」

「はい、おかげでちゃんと仲良くなれました」

なのははえへへと笑っている。
フェイトの方も少し笑っていた。

「太久郎さんのところはどうだったんですか？」

「俺か？俺のところはいつも通りだな。学校行って、友達と話をして、昼食をして…あと今日はしなかったが、いつもならここに部活が入るな。時間も今日より遅くなる」

今日太久郎は買い物をするために、部活を休んで早く帰ってきたそうだ。

「学校ってどんなのですか？」

とフェイトが学校のことを聞いてきた。

「そうか。フェイトちゃんは学校を知らないもんな。しかし俺のところは高校だからな。行くなら小学校……」

太久郎は思考するが途中で止めた。
この２人はここの住人ではない。
異世界の人物である。
つまり、

「戸籍無いから、どう考えても入れねぇ……」

お金の問題なども大いにあったのだが、それ以前の問題であった。

なのはもこれには苦笑いしかできなかった。

「そうだよ。なのはちゃんとか元々学校行ってたよな？勉強とかどうする？」

「どうしよ……」

なのはは小学生で義務教育中である。

ここで学力を落とすとならば、後々困ってしまう。

基礎を固めないとこれからの問題や中学の問題も解けないのである。

そもそも学校を休んでいるのはいいのか？という問題は帰る方法がないためあえてここでは指摘しなかった。

「仕方ない……、デパートの中にある本屋で問題集とかそういうの買ってくるか。で俺が先生をするよ」

「すみません、何から何まで……」

と二人は会釈する。

「前も言ったけど、大丈夫だって。先生って言っても小学3年生の問題だぜ。こっちは高校生なんだから」

と笑っていた。

そうしているうちにいつの間にか3人は食べ終えていた。
太久郎はさてと立ち上がり皿を片付け始めた。

「俺が片付けている間に、2人はお風呂入ってきたら？」

「えっ、でも悪いですよ。一番に貰うなんて」

「ん～、効率的には先に入ってきてもらって方がいいからさ。先に入っておいでよ」

とにこっと笑って先を譲った。
もちろん今のは建前で本当は男の後の風呂は嫌だろうと思っての気遣いである。

「じゃあ、すみません」

「私もですか？」

「あっ、うん。一緒にでかまわないかな？」

「いいですよ」

とフェイトにも風呂に入ってきてもらうように促した。

「じゃあ、タンスに入ってるタオルと今日買ったパジャマを風呂場に持っていって」

「はい、わかりました」
なのはとフェイトは太久郎に言われた通りのものを脱衣所に持っていった。
「さて、皿洗い「太久郎さん。」ん？」
なのはとフェイトが脱衣所に行ったのを確認した太久郎は皿洗いを始めようとしていた。
しかしそのとき脱衣所からちょこんと顔を出したなのはに呼び止められる。
その下には同じようにフェイトも顔をちょろっと出していた。
「どうしたの？」
太久郎も何か不都合でもあったのかと、なのはの方を向く。
しかし次のなのはの言葉は…
「覗かないでくださいね」
「なっ……」
「冗談です」
なのははくすっと小悪魔的な笑みを浮かべると顔を引っ込めた。
フェイトも少し笑って顔を引っ込めた。

フェイトが顔を引っ込めると脱衣所の扉もキチンと閉まった。

本当に冗談だったのであろう。

もうすでに脱衣所の方から笑い声が聞こえてくる。

「……」

だが太久郎の方は違った。

不意にも太久郎は今日の夕方のあの出来事を思い出してしまっていたのだ。

顔は赤くなっており、放心状態となっている。

「はっ、いかんいかん」

しかしそれもつかの間。

すぐに意識を取り戻す。

とそれと同時に背徳心を覚え、心の中でなのはとフェイトに謝っていた。

そして平常心を取り戻そうと皿洗いを始めた。

２人は１０分ほどでお風呂から出てきた。
そして続けて太久郎も入り、同じように１０分ほど入って出てきた。

３人は今、リビングでくつろぎながら、会議をしていた。

「じゃあ、俺がいない代打はできる範囲で家事を頼むな。無理なやつはしないでいいから。俺が後でするし」

「はい、大丈夫ですよ、心配しないでください」

「できる範囲だけですし、そんな無理なやつもないと思います」

太久郎は明日部活に出るため少し遅くなる。
そのため２人には家の家事などをやってもらうことになった。

昼食についても太久郎の料理にバリエーションでは少ないため近くのコンビニで買ってきてもらうことになっている。

他にもここら近辺の地図を書いてあげたり（太久郎もここ出身ではないためうろ覚え）、出かけるときの合鍵などさまざまなことを話し合った。

中にはこんな話も――――

「ところでテレビのチャンネルどうする？」

と太久郎の言葉に残り2人の目がギラリと光る。

それは何か獲物を狩る目に等しかった。

「俺はスポーツ「バラエティー」「アニメ」……」

見事に全員不一致。

ちなみにスポーツは太久郎。バラエティはなのは。アニメはフェイトである。

この時点で3人は何かを悟とる。

それでもと大事な物のためにと駆け引きである。

「……よし、ここは年上に優先だよな？」

とここで太久郎はここぞとばかりに年上であることを主張。

「いえいえ、ここはレディーファーストでいくなの」

「それなら私も女の子だけど？」

と今度は2人の主張。

2人も一歩も譲る気は無いらしい。

「「「……」」」

沈黙。
だが3人の間には視線が行き交っている。
そして3人は同時に1点を見つめる。
『勝利の戦利品（テレビのリモコン）』

そして3人が動くのもまた同時だった。
「ドリャッ！」
「ハッ！」
まず手が届きそうなのは、手のリーチが他よりも長い太久郎。
そしてスピードが速いフェイトだ。
2人とも飛び込んむ形でジャンプをする。
手は同時に届く。

だが、同時故にリモコンをお互い弾いてしまう。
それを狙うは一歩出遅れたなのは。
一気に奪おうとしたその時、横からリモコンに蹴りを入れるものが。
「にゃっ！？」

「甘いわ！」

太久郎である。

体勢を崩している中、無理やり体を半回転させて蹴飛ばしたのだ。

しかしそれを追って飛んでいくものもいる。

「もらった！」

フェイトである。

しかし掴もうとしたそのとき、白い物体がリモコンに当たる。

「そりゃ！」

「ッ！」

太久郎の投げた野球ボールだった。

さすが野球部というべきか。

多少体勢を立て直したとはいえ、あの体勢から当てるとは見事である。

だがリモコンの方も野球ボールに直撃したことによって空中を舞う。

「今度こそ」

なのはは先ほどの体勢から立ち上がり、空中のリモコンを掴もうとする。

しかし

「ハアァ！」

床を這うフェイトがなのはの足を引っ張り、なのはを引きずる形で体勢を無理やり崩す。

それによりなのははバチンと顔面を床にぶつける。

『※良い子は真似しないでね』という注意が付きそうなやり方だった。

「いっつ……あっ、リモコン」

「「あっ」」

と3人の声。

空中を舞ったリモコンはなのはが体勢を崩したことにより、アタックされるように手で弾かれた。

そしてその先に窓が。

窓から飛び出したリモコン。

外からは嫌な音が…。

「「「……ＮＯｏｏｏ！！」」」

と3人は絶叫だった。

その後3人は家を飛び出し、リモコンを見つける。

幸いなことにここが二階だったことと、下が花壇だったためリモコンは壊れずにすんだ。

そして再び会議でテレビのチャンネルの主導権を曜日によって決めた。

これは後の『黒歴史戦争（ダークウォー）』と呼ばれる太久郎達の一つの事件になったとかならなかったとか。

太久郎はその後、時間も遅くなってきたためなのはとフェイトを寝かしつけた。

太久郎は0時くらいまで勉強をするためリビングで勉強していた。

なのはとフェイトは昨日を同じく太久郎の（元）寝室で、太久郎はソファーで寝ることになっている。

「ふぁ～、さて寝るかな」

深夜０時頃、太久郎は大きな欠伸を一つ。
それを一段落として勉強道具を片付ける。
「っと、寝る前になのはちゃん達の様子でも見るかな」
何を思ったのか太久郎はそっと扉を開け、部屋に入る。
静かに歩き、なのは達の顔をのぞきこむ。
「ぐっすり寝てるな」
やはり寝顔は可愛いものだと思った。
太久郎は寝ているとわかったので出ていこうとした。

「お母さん……」

しかしそのときフェイトの口から聞こえた。
ある言葉が。
もちろん寝言だろう。
だがそれには太久郎に考えさせるものがあった。
「フェイトちゃん……」
よく見るとなのはの方にも薄っすらと涙を伝った後があった。
そっと部屋から出た太久郎は決心する。
「俺がちゃんとしないとな。例え親代わりにならなくても安心でき

るような…くつろげるような…そして泣かなくてもいいような……」

それは2人の気持ちを埋めるには足らないかもしれない決意。

『偽善』

そんな言葉が使われてしまうかもしれないような決意。

だがそれでもと。

少なくとも今は笑顔になって欲しいと思っての決意の現れだった。

勝負（バトル）（後書き）

６話目です

今までで一番長くなってしまい、遅くなりました…
すみません

さて今回は
・晩御飯＆勉強の話
・風呂に入る前の出来事
・『黒歴史戦争』
・なのは達の寂しい気持ち＆太久郎の改めての決意

…最近この後書きがまとめになっております

まあ自分がやりたくてやってるのですがｗ

そして今回やっと二日目が終わりました！
３、４、５、６話とかけてやっと…
一日長っ！

次はもう少しまとめます…

そして今回は…『黒歴史戦争』に力入れすぎだろ！
戦闘シーンでもないのに（笑）
変なところで力が入ってしまうｗｗｗ

おい、そこ
『そんなに戦闘シーン上手くないね』って雰囲気だすな
んなこと最初から自覚している（爆）
あとちなみにテレビのリモコンのネタは実体験からです
いやこんなに酷くないですよ？（笑）
ただ妹とチャンネルの奪い合いってあったなぁって思って書いたネタですし
実際リモコンを妹が隠した場合、締め上げて白状させたりしましたねｗｗｗ（いちよう６歳年下）
もううざかったのでボコボコにしましたよｗｗｗ
では感想、評価、質問、誤字脱字等よろしくお願いします

魔法（ファンタジー）

翌朝。
３人は朝食を食べ、その後太久郎が行くまでの間話をしていた。
何気ない話である。

となのはが唐突に何かを思い出した。
「あっ、そうだ、レイジングハート」
「バルディッシュも」

なのはは自分のデバイスを思い出し、タンスの上に置いてある赤い球体――――レイジングハートを取る。
フェイトも同じように黄色い球体――――バルディッシュを取った。
「よかった。ちゃんと直ってる」
「こっちも直ってる」

２人は自分のデバイスの状態を見て安心していた。

２人のデバイスはジュエルシードの影響でボロボロになってしまっていた。
そのため昨日、自動修復機能をフル稼働して直していたのだ。
それが今二つのデバイス、両方とも全回復していた。

「ん？デバイスだったっけ？それ直ったのか」

「はい。おかげさまで直りました」

なのははとても嬉しがっていた。

太久郎の目から見なくともそれがよほど大事なものだとわかる。

フェイトも同様に嬉しがり、早速と首から提げていた。

「これで、魔法のことも証明できますね」

「あー、あ……」

実は太久郎、未だに魔法のことを信じていない。

確たる証拠がなかったためだ。

今まで魔法と認められていなかった2人だが、それを証明できるとフェイトは含みのある笑を浮かべている。

なのはもフェイトの思考がわかっているのか同様な顔をしていた。

ただ太久郎に関してはあまり乗り気ではないようだが。

「じゃあ、今から変身しますね」

となのはとフェイトは仲良く隣同士に並ぶ。

そして2人は自分のデバイスを掲げながら言い放つ。

自分が魔法少女の証(あかし)である姿に変わるため。

「レイジングハート、セットアップ！」

「バルディッシュ、セットアップ！」

言い放つと突如、桃色の光と金色の光が部屋中を照らした。
それに慌てる太久郎だったがそれも一瞬の出来事ですぐに光は治まった。

とそこには違う姿になっていた少女(なのはとフェイト)がいた。

これこそが魔法(しんじつ)なのだと。

確かに太久郎は魔法(オカルト)を信じていなかった。
だがそれでも薄々ではあるが、科学や現実での現象では説明できないことがもあった。

太久郎はそれでもと認めていなかったが、今は無理だ。
現象(まほう)として存在しているのだから。

「……」

これには太久郎も唖然となっている。
かっこ悪く口まで開いてしまっている。

「大丈夫ですか？」

フェイトは心配そうに太久郎に話しかける。
それにハッとなる太久郎。
「ほ、本当に魔法少女だったのか！」
「だから最初から言ってたなのーーー！！」
そう最初からなのはは魔法少女であることを自白、そして主張していた。
それを信じなかっただけである。
それに呆れと怒りで吠えるなのは。
フェイトは横で「どうどう」となだめていた。
「しかし…本当に対極な色合いだな。白と黒か。まあ両方とっても似合っているけどな」
太久郎にとっては率直な感想なのだが、太久郎の言葉によって2人の顔が赤くなっていた。
太久郎はそんなことには気づかず、物珍しそうに2人の姿を観察していた。
「そういえば、変身したけど…具体的に何かできるのか？」
「あっ、はい。空を飛んだり……」

「マジで！空を飛べるの！？」

なのはが言い切る前に太久郎は若干興奮気味に驚いていた。

1度信じきるとあっさりとしたもんで太久郎はさっきの状態とは嘘のように魔法というものに興味が沸いていたのだ。

「あと、こんなこともできます」

とフェイトは手の近くに光の球体を作ると、台所に置いてあった空き缶に当てる。

それを見た太久郎はおおっと関してしまう。

「すッ、スゲー！他にどんなことができるの？」

「あのすみません、屋内だとそんなにできることがないんです。動きが制限されますから」

「そうか。残念……」

なのはが謝ると太久郎も少し残念がるが、屋外では他にもできることとか自分ももしかしたらできるのかなどと期待に胸を膨らましていた。

これが先ほどまで魔法を信じていなかった人間には今では見えないだろう。

「念話なら簡単にできるのですが……」

「念話？」

「頭の中で会話ができる魔法です。テレパシーだとかと思ってくだされば結構です」

なのはの説明に太久郎はなるほどと納得していたが、フェイトがしかしと付け加える。

「念話などの魔法を使うためにはリンカーコアが必要なんです。リンカーコアは魔力を作るために必要なものなんですが…。太久郎さんにはないんです」

「ということは俺は魔法は絶対できない？」

「……そういうことになります」

「まあ仕方ないか……。いいよ、魔法を見れることだけでも十分嬉しいし。……どうせ３０歳まで童貞だったら魔法使いになれるし」

フェイトの丁寧な説明に太久郎は落胆するかと思ったが、そう都合よくもいかないかと自分で納得して我慢した。

最後の方の言葉はなのは達に聞こえないように言った。

恥ずかしいのはもちろん、男としてものすごく悲しいからだ。

「どうかしましたか？」

「いやなんでもない」

フェイトは少し太久郎のことが気になったが、太久郎はいいと言ったのでこれ以上は何も言ってこなかった。

そしてなのははというと、んーと考え事をしていた。

「えっと、土曜日か日曜日って開いてます？もしくは早朝とかでも良いんですけど」

どうやらなのはは太久郎が見たいと聞いて、日程を考えていたようだ。

「平日は無理だな。バタバタしてて忙しいから。夜も勉強時間だし。土日は…野球の日程によって変わる。特に土曜日とかは午前中学校だし」

と言いながら自分の携帯のカレンダー機能を開く。

「うん、大丈夫だ。今週の日曜は野球休みになってる」

なのは達に伝えるとパァと明るく笑顔になっていく。

「じゃあ、日曜日に」

フェイトは嬉しそうに約束し、

「あのあまり人目がない時間帯がいいので朝早くでいいですか？」

なのはは細かい取り決めをしていた。

「ああ、平日でなければ朝は大丈夫だよ」

それを聞くとなのはは再び嬉しがっていた。

「僕も楽しみだなぁ。２人の魔法。どんなのかなぁ」

なのはやフェイトは嬉しがっていたが、太久郎も同じく心が躍っていた。

「ハハハ、あまり期待しないでくださいね。私とかまだまだですから。フェイトちゃんの方が断然上手です」

「そうなのか？」

「そんなことないです。何回も戦ってますが、その度に強くなってます。追い抜かれるのも直ぐかもしれません」

なのはがフェイトのことを褒める。

それにフェイトは照れと謙遜で対応する。

だがフェイトの言ってることも強ち間違いではなかった。

なのははフェイトと戦う度に成長していた。

長年魔法を習っていたフェイトだが、なのはと戦う度に成長速度に驚かされていた。

しかしそれと同時に期待、そして『負けたくない』という気持ち

が心の中にあった。

それは敵だからではない。
友達（ライバル）としてだ。
今だからこそ使命ではなく自分の意思で勝ちたいと思っていた。

おそらくなのはも同じ気持ちだろう。
友達だからこそわかる。

これはフェイトの人生で初めての経験だった。
でもそれは嫌なものではなく心地よいものだった。

「フェイトちゃん？」

少し考え込んでいたフェイトはなのはの声で気がつく。
太久郎となのはは心配そうに見ていた。

「大丈夫です」

フェイトは短く答えて安心させた。

となのはは安心したのも束の間、今度は何かを発見して慌てだす。

「太久郎さん…あの…時間大丈夫ですか？」

「ん？大丈夫、大丈夫。時計の針もまだ８時１５分を指してるだろ」

と今回はいけると太久郎は笑っていたのだが…

「あの時計止まってませんか？」

「な、何！？」

なのはの一言で太久郎も慌てて携帯の時計を見た。

そこに表示されていた時間は――――

――――８時３０分だった。

「……」

今彼の気持ちはこうであろう。

『／（＾ｏ＾）／オワタ』

やはりここからの太久郎の動きは早かった。

さっさと用意をすませて、家を出た。

なのはとフェイトは呆然をみていたがこうも思っていた。

「がんばれ」と。

魔法（ファンタジー）（後書き）

7話目です

さて今回は

・魔法について

・フェイトの勝ちたいという心情

はい、やっと変身しましたw

レイ&バルやっと直ったね

今まで忘れてたんじゃないのか？ってほどでてこなかったですが、ちゃんと進んでました

フェイトの心情の変化はなのはと過ごしてるからというのもありますが、今はプレシアに縛られてないっていうのが大きいでしょう

元々ライバルですからね

こういう気持ちはあったと思うんですが、やはり親からの使命があったのでこういう気持ちが表に出てこなかったのかと

では感想、評価、質問、誤字脱字等よろしくお願いします

練習（トレーニング）（前書き）

自分の小説二部構成だったり、三部構成だったりするからタイトル難しいぜw

ではどうぞ

練習（トレーニング）

太久郎が出ていったあと、なのはとフェイトは近くの公園にいた。
朝も時間の公園というのは穴場みたいで人はいなかった。

そのためここで一日ぶりとなる魔法訓練をしようということになったのだ。

と言ってもフェイトは基礎ができてるのでほとんどなのはの訓練になるのだが。

「フェイトちゃんいくよ」

「うん、がんばって」

今なのはがやっている訓練はユーノとよくやっていた魔法の制御をする訓練だ。

小さい光の球体を作り、１つの缶に何回も当てるのだ。
今回は１０回当てたらＯＫという目標を立てた。

これの難しいところは球体が缶に当たると弾かれて不規則に飛ぶこと。
そして落ちるまでの時間が思ったより少ないので球をすぐにＵターンさせなければならないことだろう。

「まず1、2……7、あっ落としちゃった」

なのはは数を上手く重ねていったがどうやら7回目で失敗したようだ。
やはりまだ発展途上なのであろう。
精度がまだ甘いみたいだった。
「ああ、残念。フェイトちゃんに良いとこと見せようと思ったのに」
なのはは悔しがるも、笑顔で言った。
「今度はフェイトちゃんやってよ」
「うん、いいよ」
今度がフェイトの番だ。
なのはと同じように球体を作り出す。
違う点は色がなのはは桃色に対して、フェイトのは金色という点である。
「いくよ。1、2、3……8、9！フィニッシュ！」
フェイトの方は順に回を重ねていき、そして最後はおもいっきり当てて缶を中に上げた。
それを片手でキャッチして、見事ポーズを決め成功した。
「わぁ、凄いよ、フェイトちゃん。」
「そんなことないよ。これは昔からやってた訓練の一つだし」

なのはがフェイトの魔法の技術を見て、心の底から称賛した。
それにフェイトはおなじみながら照れていた。
「へー、フェイトちゃんもこういう訓練してたんだ。稽古つけてもらってたのは誰？私はユーノ君に教わっていたなの」
なのはは訓練のことより、フェイトの師匠に興味をもったようだ。
「リニス。リニスに習ってたんだ」
フェイトは何か懐かしがるように、少し寂しい雰囲気を漂わせながら言った。
（リニス……）

リニスは優しかった。
フェイトはそのころからプレシアに冷たくされていたが、リニスはそんな私を暖かく見守ってくれた。
もちろん厳しいときもあったけど、それは愛情の裏返しでリニスは母親のように接してくれた。
フェイトとアルフの世話をしてくれて、魔法のことを教えてくれた先生でとても良い人だった
――――そうなのはに言った。

「そう。フェイトちゃん、リニスさんのこと好きだったんだね」

「うん。でもリニスだけじゃないよ。アルフもお母さんも、なのはも。そいて太久郎さんもみんな好きだよ」

フェイトの言ってることは本当のことだろう。
例え、親に冷たくされても決して折れない心。
揺らがない、折れない、強い心。
それは支えとして今なのは達がいるからであろう。

「私もフェイトちゃん達のこと好きだよ」

なのはも負けじとフェイトにいう。
そこには友達としての想いがあった。

「ありがとう。じゃあそろそろ帰ろう」

それに少し照れたフェイトだが、誤魔化すように帰ろうと促した。
なのははわかっているのか少し笑っていた。

昼過ぎ。
なのはとフェイトは公園から帰ってきたあと昼飯を食べた。
昼飯はコンビニで買ってきたサンドイッチで済ましていた。

そして2人は今何をしてるのかというと――――

「大掃除作戦なの！」

なのはが高らかに宣言する。

「おおー！」

フェイトの方も性格からは珍しく気合が入ってるようだ。

そうしてこうなったかというと単純なことだ。
日ごろお世話になっている太久郎への恩返し。

もちろん太久郎からの使令（だが決して命令ではない）によるものもあるだろうが、それでも2人の優しさによるものが大きい。

そのため幾分か気合の入り方が違った。

「私は……洗物を」

「じゃあ私は洗濯ね」

２人はそれぞれ分担を決め、各々の場所に向かう。

――――なのはｓｉｄｅ――――

なのはは脱衣所につくと、目の前の洗濯物を入れてあるカゴに向き合っていた。

向き合っている理由は…量が多かった。

一応下着と上着＆タオル系と分けて洗濯をする。

そして下着の方は太久郎が出かける前にしてあったので今は上着＆タオル系の方なのだが、３人分というのは女の子には少し重いみたいだ。

「仕方ない。少しずつするなの」

なのはは決心をする。

「よっこいしょ」

なのはは少しずつ動き、ゆっくりと洗濯機に服を入れる。

「ふー、次は……洗剤と」

なのはは洗濯機の横に置いてあった洗濯用洗剤（ブ〇ーダ〇ヤ）を取る。

そして入れようとしたそのとき――――――

――――フェイトｓｉｄｅ――――

一方フェイトは皿洗いをしていた。

リニスに教えてもらった技術（スキル）や一人暮らしもしていたこともあり、フェイトは料理以外（これだけはどうしても無理だった）の家事についはだいたいできた。

「～♪」

そのため今は鼻歌交じりに楽しく皿を洗っていた。

のだが……

『キャー！！』

いきなり脱衣所からなのはの悲鳴とともに変な音が聞こえてきた。

「なのは！！」

それに何事かと慌ててフェイトは脱衣所に向かう。

そして勢いよく扉を開けると……目の前は白の世界に包まれていた。

というよりは洗濯用洗剤で視界が埋まっていた。

「な、なのは？」

と心配そうに扉の方でなのはにいう。

そのうち視界が開けてくると、そこには漫画のように真っ白に変わっていた少女(なのは)が。

「えへへへ、失敗しちゃった」

とある意味、白人が苦笑いしていた。

「プ、ハハハ」

「笑いごとじゃないよ～」

フェイトは珍しく盛大に笑い、なのはも口ではそういっているが笑っていた。

その後もしばらく2人は笑っていた。

でなぜこうなったかというと、ゴキブリが出てきたらしい。

別にそこまで苦手ではないらしいなのはなのだが、さすがに足を這うようにされたため驚いて粉をぶちまけてしまったらしい。

その原因(ゴキブリ)は粉を浴びて絶命していたが追い討ちをかけるようにフェイトがフォトンランサーで跡形もなく消した。

さらばゴキブリ。

さらにその後脱衣所を綺麗にし、2人で他の場所も綺麗にしていった。

途中洗濯物を干しているときに太久郎の下着が出てきて、少し頬を赤らめる2人だったりした。

もちろん太久郎には伝わらないエピソードであった。

練習（トレーニング）（後書き）

８話目です

今回は～

・魔法の訓練

・掃除中の出来事

なのはちゃん、魔法練習中

まあたぶんこれからはフェイトが先生になるかな

先生もなのはが完全に成長しきったら終了だけどｗ

後半は掃除です

黒光りするＧは消滅です

もう滅殺ですｗｗｗ

あれはＧが悪いですからね

当然の報いです（笑）

あっ、『ブ〇ーダ〇ヤ』はリアルで家で使ってます

家のを思いっきり参考にしましたｗｗｗ

では感想、評価、質問、誤字脱字等よろしくお願いします

P．S

リレー小説というのを自分やっているのでそちらの方もよければ見てください

自分の投稿した中に『閃く生徒会』という名でありますので

料理（クッキング）（前書き）

後書きに質問みたいなものがあります

料理（クッキング）

夜も近づいてきた夕方、太久郎は駅前の本屋にいた。

別に漫画を買いにきたわけではない。

自分の参考書などを買いにきたわけでもない。

小学3年生レベルの教材を買いにきたのだ。

「ん～、けっこうあるなぁ」

なのはとフェイトのために教材を買いにきたわけなのだが、太久郎は意外と多い教材の多さに悩んでいた。

どうもこういうのを買ったことがないためにどういう品を選べばいいかわからないようだ。

「もうこれとこれと、あとはこれでいいや」

と店員を呼ぶのも嫌だったのか、太久郎はランダム同然で教材を買ったようだ。

それから用事もないのかすぐに店を出ていった。

そこに1人ある人物がいたのだが太久郎はそのことを知らない。

すっかり夜になってしまった時間、太久郎はようやく家に帰ってきた。

「ただいまー、ほら教材とついでにコンビニでアイスを買ってきたよ～」

意気揚々に入ってきた太久郎だが、あるものを見て目が点になる。

家に入るとそこには、なぜか土下座している2人の少女（なのはとフェイト）がいた。

女の子を2人に土下座させている男1人。

果たしてこの状況は良いと言えるだろうか。

いやむしろ悪いだろう。

「え…と、どうしたんでしょうか？」

「実は…」

そこで2人の説明が始まった。

何でも洗濯の時に洗濯用洗剤をぶちまけたりなどといったちょっとしたミスを多くしてしまったそうだ。

別に太久郎は些細なことなど気にしない。
ちゃんと片づけをしているのであれば、気に病むこともない。

そう考えてる彼は二言だけ言う。

「大丈夫。気にしないから」

その言葉に少女2人もキョトンとしていたが、次第に移行を取り戻してきたのか太久郎にたずねる。

「何も怒らないんですか？」

「まあ怒ってもいいんだが…、ちゃんと片付けてるし、何より真っ先に謝ってくれたからな。今さら怒ってもしかたないだろ？」

それが太久郎の持論だった。

実際には『躾』としての怒り方を知らないというのもあるだろう。
太久郎は『親』ではないのだから。

それから太久郎は「2回目はさすがに許さないかもな」と決して

怒ってるわけでなく、笑いながらそれをつけ加える。
ちょっとした冗談を言ったのだろう。

「さて、晩御飯の支度するか。ちょっと待ってろよ。今作るから」
先ほどの話はもう終わりと切り上げるように、太久郎は晩御飯の準備をしようとする。

が、

「あの、今日は私たちにさせてもらえませんか？」
なのはが太久郎に提案というよりお願いする。

それに少し驚く太久郎。

「え？でも、大丈夫？料理したことあるのかい？」

「簡単なのならできますよ」

となのは答える。

フェイトはあまりしたことないらしいが、がんばってみるらしい。

それにんーと悩む太久郎なのだが

（ここはやらせるのも経験になるか。こういう経験もいい勉強になるし。いざとなれば俺が止めればいいしな。よし）

考えがまとまると太久郎は、なのは達に言った。

「じゃあ、今日は任せようかな。ただし、今日の献立はちゃんと考えてたからそれを作ってくれよ」

そういうとフェイトに献立の書いてある紙を渡した。

そこには一言こう書いてあった。

『カレー』

（ああ、しまった。今日買っとけばよかった……）

実は太久郎失敗してしまったと思ったことがある。

今日本屋に行ったのだ。
ならば料理を買ってきとけば、なのはやフェイトにレシピを見せながらできる。
そして何より料理の幅が広がったかもしれないからだ。

「……明日買ってくるか」
「何か言いましたか？」
「いや、何でもない」
始めは独り言を言っていたのだが、途中で口に出てしまいなのはに聞かれる。
別に隠すことでもないのだが、逆にたいしたことでもないので軽く誤魔化した。
特に意味はなかったのか、なのはもそれ以上何も言わなかった。

そしてそんなことを考えている間にもカレーのじゅんぴは進んでいた。
2人は野菜やお肉を切っている。
「うう、フェイトちゃん、目が染みるよ～」

「玉葱だからね」

楽しく切っているのだが、それに反して太久郎はヒヤヒヤしている。

米を研いで、炊飯器で炊いたら即刻追い出された太久郎。

今はテーブルの上に座って椅子を見ているのだが、なのは達のことが心配だった。

（指とか切るなよ……）

もちろん、話したりしているが、そんなへまをふたりはしない。

包丁を使うときは余所見していないのだから。

そしてすべてを切り終わると今度は鍋に具材やカレーのルー。

そして味付けなどを順にしていき煮込んでいく。

「おっ、そろそろ完成かな」

「はい、もうすぐできますよ」

料理が完成に近づくとともに安心してくるが、今度は空腹感が出てきた。

やはり野球青年、食べるときは一番嬉しい時の一つである。

フェイトも太久郎の気持ちがわかり（というより顔に出ている）、完成の目処を伝える。

そしてしばらくするとフェイトが言ったようにカレーが出来上がる。
とそれとタイミングが合わせるように炊飯器の知らせが鳴り、ご飯も炊き上がる。
2人はご飯とカレーを同じ器に盛り付け、カレーライスにする。
そしてそれをテーブルに並べた。

「よし、できたな。うまそ～」

「はい。がんばって作りましたので」

「いっぱいあるからたくさん食べてくださいね」

フェイトとなのはがそれぞれ答えると3人は席につき、食べる前の挨拶を済ませて、食べようとする。

「まず、太久郎さんから食べてください」

なのはは自分達の作った料理のできを真っ先に太久郎に食べてもらいたいのだろう。
フェイトも同じように太久郎の方を見ている。
こうも見られると食べづらいこともあるのだが……

「（見た目も良いし、香も良いいな）そうか。じゃあお先に頂きま

ーす」

そういうと太久郎はパクッとカレーを一口。

「「どうですか？」」

２人は味が心配のようだが……

「うん、凄くおいしいよ」

その一言でパッと明るくなり、とても喜んだ。
嬉しがっていた。

よっぽど嬉しいのだろう。
２人はぴょんぴょん跳ねていた。

３人はカレーをたくさん食べたあと、それぞれ順番にお風呂に入り、２人を寝かしつけた

そしていつも通り勉強道具を広げた太久郎は一つ思い出した。

「あっ、なのは達の勉強……」

もうすでに寝てしまったので起こさなかったが、すっかり忘れていたのであった。

料理（クッキング）（後書き）

9話目です

今回は
・本屋で
・カレー作り
・オチ

なんか最後いらねぇなw

最初は…まあ伏線です
それもバレバレの（笑）

料理は…思いつきですね
本当特に意味はなし！
説明しようにも思いつきでしかないし、別に伏線とかもないしね！

あと今回皆様に少し質問みたいなものを聞きます

質問なんですが…
まずこの作品の始まりでもあった魔法少女リリカルなのは無印でのアニメ7話での話しなんですが…
このジュエルシードが爆発？した日から最終回のフェイトとなのはがいったん別れる日までっていったいどれくらいなんでしょうか？
A' sの方はなんとなく冬とか期間はある程度わかるのですが…無印のしかもこんな中途半端なところではわからなくて…

できれば勉強不足の僕に皆様の知恵を教えて欲しいです
わからなければだいたいでもいいので
では感想、評価、質問、誤字脱字等よろしくお願いします

追跡（チェイス）（前書き）

後書きにお知らせが２つあります

追跡（チェイス）

次の日。
なのは達が来て４日目で水曜日。
学校の授業も終わった放課後のクラスに太久郎はいた。
なぜ部活もぜずにいまだにクラスにいるのかというと――――
「雨か……」
雨である。
運動場などの外で行う部活、主に体育会系の部活にとっては天敵のような天気である。
「まあ、雨なら仕方ないだろ」
とだらけている太久郎の隣から話しかけている人物は幸星である。
「……お前６話ぶりだな」
「なんの話だよ……」
と若干危ない発言をかます太久郎だが、ここで新たな人物が現れる。
「ダメね。体育館とかもやっぱり開いてないわ」
幸星の姉、美幸である。

ちなみにこちらも6話ぶり。

今までどこか使える場所がないか探していた彼女だが、無理だったらしく教室に帰ってきたようである。

「お疲れー。この様子だとやはりダメだったみたいだな」

「ええ、そうね。どこも開いてないわ。昨日ミーティングはしちゃったし…。今日は部活は中止ね」

美幸は残念気に話す。

「んじゃあ、今日はこのまま帰るか。姉貴はどうする？」

「私も帰るわ。特に用事もないしね」

「うっし、帰るか」

と3人は意見が一致したので出ていこうとするが。

「あっ、タク。ちょっと先に出ていてくれ。ちょっと俺は姉貴に用事があるから」

「なんだ？実姉で告白の練習か？」

「ちげぇーよ！なんで告白の練習するんだよ！」

太久郎がボケるのに、幸星はすかさずツッコミを入れる。

「あら、そうなの？じゃあ、ちゃんと女の子からＯＫもらえるよう

に練習しないとね」

「姉貴、絶対察しがついて言ってるだろ！？」

美幸も太久郎のボケに乗っかってきたが、それもツッコンで黙らした。

その後太久郎は教室から出ていき、篠寺姉弟が教室で話していた。しかしその話もすぐだったらしく、下駄箱のところで再び合流した。

「もう済んだのか？」

「まあな。ちょっとだけって言っただろ？」

太久郎はふーんと言うとあとは興味がないため話はそこで一旦終わった。

そして3人は雨なので傘を差し、校門を出た。

「そうだ。今日、タクの家行っていいか？」

校門を出てすぐ幸星は太久郎にそう聞いてきた。

この姉弟は一度も太久郎の家に行ったことがない。

そのため今日暇になった時間を活用して行こうと思ったのである。

美幸の方も同じような顔で太久郎の様子を見ている。

こちらも行きたいのであろう。

で当の本人の返事はというと

「ごめん。今日時間があるから行きたいところがあるんだ。すまんな」

やんわりと申しわけなさそうに断った。

しかし本当の理由は行きたいところがあるとかいう些細なものではない。

本当の理由は家に呼べないのだ。

『2人の少女、なのはとフェイトによって』

太久郎の周りにや学校には1人暮らしと言ってある。
もちろん入学した当時は1人暮らしだった。
推薦でこっちに来たのだから。

だがそれも今では別である。
今は1人暮らしではない。

女の子と、しかも2人と一緒に暮らしているのである。
それも魔法少女だったり、異世界の住人だったりと普通の人には教えることのできないのある。

そんなことを周りや学校はもちろん身内にも『絶対』教えることはできないのだ。
戸籍もない子を危険とまでは言わないが、少なくとも別れ別れの状況には作りたくなかったのである。

だから知られるわけにはいかず、呼べなかったのだ。

「そうか。仕方ないな」

幸星はしぶしぶ引き下がりこれ以上は言わなかった。

それに内心ほっとする太久郎。
あまり言われると誤魔化す自信がなかったためだ。

その後3人は帰り道が途中まで一緒のため仲良く喋りながら帰っていく。

「おっと、今日は俺こっちだな。じゃあな、幸星、美幸」

「おう、また明日」

「バイバイ。」

太久郎は今日用事のため道が違う

そのため一瞬道を間違えそうになるがすぐに気づいて、幸星達に手を振って別れる。

幸星達も同じように挨拶をして別れた。

太久郎は別れた後、用事だと言っていた場所に向かっていた。
用事といっても買い物に行くだけなのだが。

「さすがに、今日は買わないとな。晩御飯がたくあんとご飯だけという状況は作りたくない」

独り言のように呟き、内心1人苦笑していた。

だが太久郎の言っていたように冷蔵庫の中は空っぽといっていいほど食料はなかった。
冷やしているのに冷やすものがないとは悲しい状態かな。

そのため今日時間ができたたので意地でも買い物に行きたかったのだ。

（まあこれくらいなら言っても良かったんだがそのあとついてくるって言われると困るかわなぁ）

2人の友達に罪悪感を覚えつつも、こればかりは仕方ないと自分に言い聞かせた。

その後も駅前のデパートに向けて歩いていた。

しかしその背後で――――――

――――？？？ｓｉｄｅ――――

「ふーん。どうやら道からして駅前に向かうようね」

「みたいだな」

太久郎の後ろからある人物２人がつけていた。

「駅前に何を買いに行くんだろうな、やはり姉貴の言っていた『物』か？」

そう太久郎の後ろにはなぜか美幸と幸星がついてきていた。

それも電柱や曲がり角などに隠れていかにも尾行してますっといった感じが出ていた。

「さすがに駅に向かうってことだけだとわからないわよ。駅前にはお店たくさんあるし。でも本屋で『あれ』を買っていたのは間違いないわね」

そもそも2人が尾行しているのには訳がある。
それは先ほどから『物』や『あれ』などと言ってることが起因している。

美幸が本屋で太久郎を見たのが原因であった。
しかしそれだけだと普通はここまでするどころか何もしないだろう。

そう太久郎が3年生の教材を買っているのを見てしまったのである。

そのため美幸が尾行しようと言い出し、教室で本格的な打ち合わせをしていたのである。

「確かに俺ら高校生がそんなのを買うのはおかしいな」

太久郎は高校生である。
高校生にとって小学生の教材は全くもっていらないものである。

そうなると……

「家に小学生がいるってことね。全く1人暮らしじゃなかったのかしら」

「従兄弟って可能性も低いわな。わざわざ従兄弟に勉強道具をプレ

ゼントってありえないからな」

２人は適当な推理を立てつつも、太久郎の後を気づかれないようにつけていた。

もちろん太久郎の方は気づかない。

――――太久郎ｓｉｄｅ――――

しばらく歩いていると太久郎はふとある店の前で歩みを止めた。

そう例の本屋である。

「……料理の本を買っていくか」

そういうと太久郎は向きを変え中に入っていく。

「えっと……ああここだな」

本屋に入った太久郎は料理のコーナーを見つけて、どれがいいか吟味していく。

――美幸＆幸星ｓｉｓｅ――

太久郎を追ってきた姉弟2人は店の外で隠れながら見ていた。

なぜならこの店はいうほど大きくはない。

そのため隠れていても見つかる恐れがあるからだ。

それでもばれない程度に窓から太久郎のことを見ていた。

「料理の本を見ているな」

「そうね」

2人はつまらなそうな会話をしているが、実際つまらないのだから仕方ない。

何も状況が動かないで、こちらも見てるだけほどつまらないものはないのだから。

「たくっ、これならまだ尾行している方がマシだぜ。なっ、姉貴って……あれ？」

幸星が暇の中、気を紛らわせようと隣にいるはずの美幸に話しかけるがそこには彼女の姿はなかった。

「おい、どこに……って」

いなくなった美幸を探すため幸星はキョロキョロと周りを見渡すとすぐに見つかった。

隣の店につながっている犬と戯れていた。

お座りやお手などさまざな芸をして遊んでいた。

女の子と犬とは良い絵になりそうだが、弟のためそんなことは気にせずズンズンと美幸に近づく。

「おい！なんで姉貴は遊んでんだよ！」

「ん？だって暇じゃない。尾行なんて1人やってれば大丈夫でしょ」

「俺も暇なんですけど！？」

2人はちょっとしたコントみたく言いあっている。

しかしその途中本屋から太久郎が急に出てくるのが見えた。

それを俊敏に反応した2人は路地裏に身を潜めた。

幸い太久郎の方は気づかなかったようだ。

「あっ、あぶねぇ……。見つかるところだった」

「全く何買ったかわからなかったじゃない。ちゃんと見とかないと」

「姉貴がさぼってたのが原因だと思うけどね！」

さっきから相変わらずの姉弟はここで言い争っても仕方ないとそのまま太久郎の後をつけた。

――――太久郎ｓｉｄｅ――――

本屋では料理の本を一冊だけ勝って出た太久郎。

実は漫画などを立ち読みしようとしたが店員にあからさまな咳払いをされたので、大人しく出てきた。

もちろんこの前なのは達の教材を買ったので他のものは買っておらず、篠寺姉弟もこのことは知らない。

その後も太久郎はデパートに行き、食料品売り場で買い物をしていたりした。

その時どこかでちょっとした騒ぎがあったみたいだが、そんなことは気にせず買い物を終えて帰宅していた。

「結構買ったなぁ」

家への帰り道、太久郎は自分の両手の荷物を見て呟く。

「でもこれでとうぶんは買わなくてすむな。料理本も買ったし」

意気揚々としている太久郎だが、だんだんと主婦っぽくなってきていることには気づかないことだろう。

その足取りは今も家に向かっている。

――――美幸＆幸星ｓｉｓｅ――――

もちろんこの姉弟もまたずっと後をつけていた。

「うへ……まだ着かないのかしら」

「姉貴疲れすぎ。まあ俺も疲れたけどな……無駄に」

ただし気を張っていたり、デパートでマネキンをドミノ倒ししたり、万引きと間違えられたりと2人は余計に疲れていた。

「本当、太久郎の家知らないから先回りもできないし……。どうしてこんなことしているのかしら？」

「うん、あんたが言い出したことだよね」

幸星が呆れかえっていると太久郎はあるアパートの敷地に入っていった。

「ここだな」

「待って部屋に入るまで待機よ」

そう言っている間にも太久郎は二階に上がっていき、ある部屋に入っていった。

「よし、部屋もわかったし、いったん今日は……」

「何言っているの。そのまま突撃よ。」

「え、ちょ……」

美幸はそういうとアパートへと向かっていく。

弟もヤレヤレと嘆息しながら姉を追っていった。

追跡（チェイス）（後書き）

１０話目です

今回は

・買い物、太久郎ｓｉｄｅ

・買い物、美幸＆幸星ｓｉｓｅ

見てわかる通り、これ次回も続きます

もしかしたら次々回まで続くかもしれませんｗ

あと前回出した伏線を今回で即回収しましたねｗ

ふっ、こういうところで推理小説向かないってわかりますねｗｗｗ

作るのもダメだし、読むのもダメって…本格的に推理ダメだな（爆）

でお知らせです

まず一つ目

この小説を２週間ほど停止します

理由は簡単です

テストだＺＥ

…学生とかが停止する理由ってたいていこれだと思うんだ

ということで楽しみにしてる皆様、しばらくのご辛抱をお願いします

そして二つ目です
このＰＶ１００００、ユニーク２０００超えました
誠にありがとうございます！

まあ８話の時点で９８００だったので超えるとはわかっていましたが…やはり超えると嬉しいですね！

でもこれで満足などしません！
ここは兜の緒を締めます！

でもやはりにやけるｗｗｗ

しかし超えても特に何もすることないんですよね…
この作品基本ある程度道に沿っているので改変もできませんし

ということで番外編とかは作りません！

でも要望があれば作ります！
もちろん時系列無視でｗ

では感想、評価、質問、誤字脱字等よろしくお願いします

密事（シークレット）

帰宅した太久郎。
太久郎は買って来たものを食材を冷蔵庫に入れていた。
「フェイトちゃん、そこの取って」
「これですか？」
「そう、それそれ」
同じようになのはとフェイトも入れるのと入れないものを分別して太久郎の手伝いをしていた。

3人はせっせと作業をしているとものの数分で片づけを終了した。
「よし、終了。早速ご飯を……といきたいところなんだが、ちょっと休憩していいか？」
「はい、別にかまいませんよ」
先ほど帰ってきた太久郎だが、へとへとになったのかすぐには動き出すことができないようだ。
そのため晩御飯を作る気力はなかった。
「あ～、部活がない日でも疲れるときは疲れるなぁ」
「日ごろの疲れが溜まっているのかもしれませんね。麦茶入れまし

ょうか？」

「ああ、ごめん。頼む」

もうすっかり太久郎専用のベットととして機能しているソファーに寝転がりながら、太久郎はなのはに頼む。

「肩でも揉みましょうか？」

「いや、いいよ。そこまでじゃないし、何より悪いからね」

机を挟んで向かい側にいるフェイトがそう提案してきたが、太久郎は丁重にお断りした。

そうこうしているとなのはが3人分の麦茶を入れて持ってきた。

「はい、どうぞ」

「ありがとう」

「ありがとう、なのは」

「どういたしまして」

太久郎、フェイト、そして持ってきたなのはも麦茶を飲んで和んでいた。

とても平和な日常のはずなのだが———

「太久郎さん、なのは。ちょっと静かにして」

「？どうかし……」

「玄関の方から人の気配がする」

フェイトは唐突になのは達に指示する。

それに何事かと太久郎は何か言いかけるが、それもフェイトに遮られる。

部屋が静かだったからか、上手く感じとれたのだろう。

「それって、扉の前にいるってことなの？誰かが通り過ぎたとかって可能性はないの？」

「たぶん違うと思う。ずっとそこにいる気配があるから。もしかしたら見張られてるかも」

なのはがフェイトに真偽を確かめるがどうやらフェイトが言うには本当のようだ。

「ど、どうする？」

「私が一気に玄関までかけて、鍵と扉を開けます。開けたら、なのはが犯人に向かって、バインドを使って」

「わかった。フェイトちゃん、気をつけてね」

太久郎が想定外の事態におどおどしているが、フェイトが冷静に作戦を2人に伝えた。

このときフェイトが冷静だったのは、昔の経験の賜物だろう。

なのはも太久郎と同じく戸惑っていたが、フェイトに言われて覚悟を決めたようでキリッとなっていた。

だが、そこで太久郎がフェイトに待ったをかける。

「ちょっと待ってよ。外にいるの誰かわからないんだろ？もし殺人犯とかだったらどうするんだ。女の子を危険な目に遭わせられないよ」

さっきまでおどおどしていた太久郎だが、フェイトの作戦にははっきりと反対した。

相手がわからない状態で危険極まりなく、なのは達がとても心配だったからだ。

「大丈夫です。少なくとも相手に魔力は感じませんので魔導師ではありませんから大丈夫です。もし殺人犯とかでもこちらにはバリアジャケットで防げますから。何より魔法少女ですから」

そう太久郎に告げると、一拍を置きなのはにコンタクトを取るとフェイトは一気に駆け出した。

（俺は何もできないのか……）

そのとき太久郎は悔しがっていた。

何もできないことが、なのは達を手伝えないことが、逆に守ってやれないことが……とても悔しかった。

結局止めることもできず、今からしてもむしろ邪魔になるだけ。

言葉だけで、何もできない自分が嫌だった。

もちろんなのは達は気にしないだろうし、殺人犯でもないだろうが、太久郎にとっては深い問題だったのであろう。

そして無常にもフェイトは玄関に近づき、そして――――

「で、お前らが玄関にいた犯人ってことだな」

「「その通りです……」」

太久郎の前には2人。
2人とも正座させられており、1人に関しては手を後ろで縛られ、さらには空いた膝の上には何冊ものジャ〇プが置かれている。
まるで江戸時代の拷問のようである。
「お前ら……幸星と美幸のせいで俺は、チクショー！」
太久郎は腕をプルプルと震えだすと、突然吠え出し、さらには壁に頭を叩き始めた。
犯人改め、篠寺姉弟は突然の豹変に驚いていた。
もちろんなのはとフェイトも驚いていたが、がんばってそれを止めていた。
「ったく、お前らが来なかったら、永遠に悩まずにすんだのに……。で、何のようで家に来た？」
「タクの事情なんて知らないわよ。それに私たちは心配でついてきたんだから」
なのはとフェイトに抑えられた太久郎は改めて、姉弟に聞いていた。
だが、美幸の返答に「え？」と驚くが、すぐに幸星が言葉を引き継ぐ。
「タク、本屋で小学校の教材を買っただろ？それを姉貴が見てな。学校や周りには1人暮らしって言ってるのが変な話だったからさ。

今日1日つけて、家にまでついてきたんだ。俺だって心配してたんだぞ」

「そうだったのか……」

幸星の言葉に太久郎は申し訳ない気持ちになる。

それを感じ取ったのか姉弟は言葉を付け加える。

「いや、別に太久郎が危険な目に会ってなかったらから別にいいんだ。小学生の女の子を2人匿ってるっつうちょっと複雑な事情があるみたいだけど、特に何もなくて安心したし」

「そうよ。まあ事情は知らないけど、何かあったら言いなさいよね。私達友達でしょ？ちょっとした手助けくらいするわよ」

2人は最初から面白半分で尾行を続けていた。

だが残りの半分は心配でついてきたのだろう。

部活仲間として、クラスメイトとして……そして友達として。

本質は心配だったから。

だからハプニングなどあってもここまでつけてきたのだ。

そう思うと太久郎は自然と涙を流していた。

「ありがとう……」

「うわ、泣くなって。そこまでされると恥ずかしいだろ」

「全く……」

幸星や美幸はそれを見て照れていた。

涙を流すほどとは思っていなかったのだろう。

「あっ、いや、すまんな。ありがとう」

「まあ、何かあったら相談しろよ」

「ああ、わかった」

改めて幸星に言われ、太久郎もそれに頷いた。

「さて、今度はそちらの女の子達の話をして欲しいのだけど…そろそろ正座をやめてもいいかしら？」

「ああ、すまん、すまん。もうやめてもいいぞ。なのはもフェイトも話に入れれなくてすまんな。」

実は先ほどの感動？シーンも正座でしていたのだが、さすがにもう良いだろうと太久郎に聞いた。

そして太久郎は美幸がなのは達の話をすると言うことで、ＯＫを出し、さらに先ほどまでほとんど蚊帳の外だったなのは達を話に加えようとする。

「いえ、気にしてませんから」

「じゃあ……」

「その前に俺の手とか解いてくれ……俺だけ正座止めれないだろ…

…」

なのはとファイトを交えた話をしようとしたところで、幸星に声を遮られる。

そう幸星はいまだに拷問（もどき）中である。

なぜなら先ほど縛られていたのは幸星であり、そのため外せないからだ。

「さっき真剣な話だったから言わなかったが、これ凄くしんどいんだけど……」

幸星はそういうと視線を向けるのだが……

「「よっし、あんなのほっといて、話を進めような」」

「ちょっと、待てぇぇぇ！！」

変なところで息の合う二人だった。

密事（シークレット）（後書き）

１１話目です

今回は

・誰かの気配

・犯人（笑）との会話

犯人退治ｗ

いや犯人はつけてた篠寺姉弟ですけどねｗ

そしてその後の後処理

…またこれ次回に続くな

うん、次で絶対終わらせますよ～

しかし久しぶり更新ですね…

テスト終わってから全く書く時間が取れない…

しかも夏休みで親とか妹がいてなかなか書く時間が…

なのでこれからも更新が１～２週間ペースになるかもしれません

すみません

では感想、評価、質問、誤字脱字等よろしくお願いします

暴露（トゥルース）

その後5人（幸星も解放した）は話し合っていた。
なのはとフェイトのことで。

2人がやってきた経緯や今日までしてきたこと、もちろん魔法のことまで。
美幸や幸星は驚きの連続だったが、実際にいることや、魔法の実演。

そして何よりなのはやフェイト、そして太久郎の真剣な顔での話しはどう考えても疑いようはなかった。

「「魔法ね（な）～」」

「まだ疑うのか？」

「いや、そういうことじゃないんだ。ただ本当にあったんだとおもって。こういうのって子供の頃に見た夢とかに出てくるようなを想像してたから」

「実際見ると魔法とは思えない魔法だと思ってね。デバイスだったかしら？それとか魔法というより科学に近い気がするわね」

嘘偽りのなく話しているのが幸星と美幸はまだ少し魔法というのを信じきれてないようだ。

「あはは、確かにデバイスは機械ですから。でもこれのおかげでさ

まざまな魔法を使えるわけですし」

「まああれだ。科学も魔法もお互い補い合っているってところだろ」

フェイトはちょっと苦笑いになりながらも答え、太久郎は自分の考えをなのは達の補足とばかりに付け加えた。

「ふーん……。まあそれはいいとして。これからどうすんだ？」

「どうするとは？」

「わかっているでしょ。なのはちゃんとフェイトちゃんのことよ。」

幸星と美幸は魔法のことをいったん横に置いて、今度はなのは達のことを聞いてきた。

具体的にはなのはとフェイトとのこれからの生活についてだ。

当の本人は名前を言われ、少しビクンと反応していた。

「まさかこれからも1人で世話をする気？」

「えっと……」

美幸に言われたく労は俯いてしまう。

同じようになのはとフェイトも俯いてしまった。

太久郎の心中も察しており、何よりこれからもずっとお世話になりっぱなしで本当にいいのかと思っていたからだ。

もちろんそんなことはないのだろうが、なのはとフェイトはそんな気持ちでいっぱいだった。

「はぁ……全く。私達も手伝うわよ」

「そうだな。三人なら楽になるだろ」

3人の様子を見かねて、美幸と幸星はそう切り出した。

それに少し驚く太久郎だがさらに美幸は言葉を続ける。

「まさか、この状況で断る気？さっきも言ったけど、友達でしょ。これを見て、手伝わないわけにはいかないわよ」

「……ありがとう」

それを聞いて太久郎は素直に感謝した。

太久郎はまた少し泣きそうであった。

「まあさすがに毎日は無理だが、ときどきならここに来てやるからな」

「いやさすがに毎日だとうざいだろうな」

「なんだと！」

幸星の言葉に太久郎はふざけた感じに言い返す。

幸星も冗談だとわかっているため、肘で小突いて笑いながら突っ込んだ。

それを受けて5人は笑顔になっていた。

「それじゃあ、そろそろ帰るわ」

「ああ、今日は色々とすまんかったな」

「なに、困ったときはお互い様だろ」

美幸は時間を見ると大分経っているのがわかり帰ることにした。

太久郎はそうとわかって2人を玄関まで送り出していた。

「じゃあ、また明日」

「おう、夜も遅いから気をつけろよ」

そうして篠寺姉弟は夜道を帰っていった。

篠寺姉弟が帰ったあと、夜も遅くなっていたため急いで食事を済ませた。

そして太久郎は先になのはとフェイトを風呂に入らせた。

なのはとフェイトも時間も時間のため、文句も言わずさっさと入っていった。

太久郎の風呂場はきっちりとした1人用の大きさであまりゆとりがない。

だが子供だと2人が入っても一人が湯船に浸かれば十分な広さとなっている。

尚且つ片方づつ洗うことによって効率も良かった。

今はなのはが浴槽に浸かり、フェイトが体を洗っていた。

「なのは」

先ほどまで楽しい話をしながら仲良く入っていた2人だが、フェイトが何か真剣な声でなのはに呼びかけてきた。
それを聞いたなのはもまじめな顔つきで聞きにはいる。

「この世界って平和だね」

「そうだね」

「ここの人達って皆温かいね」

「そうだね」

フェイトが語り、なのはがうなづきながら聞く。
なのはは一言しか言ってないがそれだけでフェイトには気持ちが伝わっているのであろう。

「……別れのときって来るのかな」

「……」

これにはなのはは答えることはできなかった。
なのはもまたフェイトの気持ちが十分伝わっていたから。

別れのときがいつ来るかわからない。

いや、もしかしたら来ないかもしれない。
そんな不安はあった。

だが今では逆に別れのときの不安があるのも確かだった。
この世界に暮らして、遊んで、楽しんで…
少しの間だけでも思い出がたくさんできた。

もし元の世界に帰ってこの世界に一生来れなくなったら思い出が思い出だけで終わってしまう。
二度と会えないなんてそんなの……絶対嫌だ。
そういう気持ちがフェイトの中にはあったのだろう。

だからこそなのはフェイトに言った。

「大丈夫だよ」

「え？」

「大丈夫。別れのときが来てもまた来れるよ」

もちろんそんな確証はない。

けれどもそう信じている、願っているのだった。

願えば叶う。
そんな単純なことではないが、でも願わずしてどうするか。

今は信じるのしかないのだから。

フェイトもそれにうなづいて同じように信じるのだった。

そして今日も夜が更けていく。

暴露（トゥルース）（後書き）

１２話目です

今回は
・篠寺姉弟に真実
・現在の２人の少女の心情

まあぶっちゃけいつかばらそうとは思ってました

それを今にした理由は…３人ではネタが辛いなって思ったからですねｗ
だって学校の放課後しかもクラブ後に太久郎となのは、フェイトのすることといったら限られてくるんですもんｗｗｗ
その点五人になると５人でとか女の子３人でとか色々できますしね

そして最後の方は…まあ情が移ったと言いますか…
長居しすぎたんでしょうね
こうも毎日関わるとね

次回は…いつになるでしょうか…
相変わらず書く時間があまりないので２週間くらい空くかもしれません

では感想、評価、質問、誤字脱字等よろしくお願いしま

焼肉（ミール）

学校と部活を終えた太久郎。
それになのはにフェイト。
そして幸星、美幸は熱き戦いを繰り広げていた――――

「あっつ。さすがにエアコンが効いてるとはいえ、熱いな」

「そうね。あっ、そこ焼けてるわよ」

――――焼肉の鉄板の上で。

現在太久郎達御一行はというとある焼肉店に来ていた。
というのもその理由は1時間前ほど遡（さかのぼ）る

「なるほどな」

「そうそう、だから行ってみようぜ」

1波乱のあった翌日。
学校ではつつがなく進み、部活も終えたその帰り道。
いつも通り太久郎、篠寺姉弟の3人組はある話題で話していた。

「焼肉店でオープンキャンペーン……確かにこれは安いな」

「そうでしょ。だから行かない？　フェイトちゃんやなのはちゃんも連れて」

そう、焼肉店の話である。
今日駅前のデパート内に焼肉チェーン店がオープンし、オープンセールとして安くなっているのだ。
その広告を見た篠寺姉弟が太久郎を誘いに来たわけである。

「でもさすがに無理だな。仕送りされている身で、贅沢はできない。2人が払ってくれるなら別だがな」

太久郎も行きたいとは思ったがさすがに家計のこともあり諦めた。
もしここで贅沢をすると月末には家計は火の車と化す可能性があるのだ。

フェイトの持っていたお金を使えば楽に行けるがそれはフェイトのものであり、少なくともなのはのには使っても太久郎自身は使いたくなかった。

と諦めムードの太久郎だがそれに対して幸星はニヤニヤと笑っていた。
それを不思議に思い太久郎は幸星に不機嫌になりながらも聞いてみた。

「なんだよ」

「ハハハ、これを見よ！」

そう言うと幸星は一枚ポケットから何か出してきた。

……というより１万円札だった。

「何だ？　見せびらかしているのか？」

「そうじゃないわよ。これは宝くじで当たったやつなのよ」

「へぇー、１万円が当たったのか」

宝くじが当たったと聞いた太久郎は少し驚き、少し興味の眼で見ていた。
だがやはり１万円だからかその関心はすぐに過ぎ去った。

そうしてる間に幸星がこの１万円の経緯について話始めた。

宝くじを持っていたのは幸星達の父親が酔っ払って１０枚ほど買って来たのだが、そのうちの１枚をくれたらしい。
そのもらった１枚が見事当たり、それを換金してきてもらってき

た。

そして現に今手元にあるということらしい。

「でもいいのか？　折角当たったのを……」

「いいんだよ。こういうのは派手に使った方がいいだろ。……まあぶっちゃけこれが原因で姉貴と喧嘩したわけだしな。」

前者の理由を聞いて気前がいいなぁと思っていたが、後者の理由を聞いたとたんすんなり納得してしまった。

（そういや朝、妙に生傷が多かったもんな）

幸星と美幸は朝話しているときはなんともない顔をしていたが、朝は凄かったことであろう。

と言っても美幸に傷がなかったところを見ると、幸星が一方的にやられていたみたいだが。

（女は強しか……）

心の中で美幸には改めて逆らわないようにしようと思った太久郎であった。

「じゃあ、すべてそっち持ちでいいんだな？」

「ええ、かまわないわよ」

「わかった。帰ったらなのは達を連れていくから」
「おう、こっちもいったん帰ったらすぐに行くからな」
こうして3人はそれぞれ別れた。

――――そして現在5人は焼肉をしているしだいである。
「本当ありがとうございます」
「いいのよ。っとそこ焼けてるから取ってもいいわよ」
「あっ、はい」
なのはが美幸に連れてきてもらったお礼を言った。

それに美幸は気にしてなく、むしろ少し火が強いためお肉を注意していた。

なのはも焦げてはいけないと慌てて取っていた。

とここで現在5人の状況を説明しよう。

5人がどれくらい食べるかわからない、そして1万円があるということでコースは食べ放題＋ドリンクバー付きを頼んだ。

さらにその食べ放題のコースもスタンダードの1つ上、一押しコースを選んだ。

松竹梅で言う竹のコーナーで、豪華とまではいかないまでも贅沢なコースとなっている。

普段なら5人で竹のコースを選ぶと1万は超えてしまうのだが、現在はオープンセール中。

そのため5人（小学生は大人に比べて少し安い）で税込み9975円と非常にギリギリだが1万円で収まる値段となっていたためそれを頼んだのだ。

そしてそれぞれの座席はというと

一番前の通路側の左には美幸が、その奥には幸星。

そして逆サイドにの一番手前の通路からなのは、次にフェイト、一番奥に太久郎となっている。

女子グループで一つ、男子グループで一つ鉄板を使っている。こういう構成にしたのは美幸が「どうせ男2人はガツガツと雑に食べるんだからそっち2人で1つは使ってね」と言ったからだ。

実際そこまで雑に焼いていることはないが多く食べ、ペース的にも速いため男2人にしたのは正解だろう。

そしてなのはとフェイトが手前なのはドリンクコーナーに行きやすくするためである。

そのため必然的に女子グループが手前となった。

注文取るときも美幸が手前にいるので問題はなかったので、非常に良い座席となっている。

ちなみに太久郎の隣はどちらが座るかということでなのはとフェイトがジャンケンして座席を決めたのであった。

焼肉（ミール）（後書き）

１３話目です

今回は

・焼肉行くまでの経緯

・ついてからのコースや席などの説明

太久郎「いやいや中途半端に終わり過ぎだろ！」

うおっ！

いたのか！

太久郎「いたのかじゃねぇよ！　更新遅れるわ、短いわ、中途半端だわ…なんだよ、これ！」

ハハハ（汗）

えっと言い訳としては更新遅れたのは短編書いてたからで…短いのは一話で収めようと思ったら思いの他長くて二話に分断したため…中途半端なのはそのため…

太久郎「言いたいことは？」

どうもすみませんでした！

次は分断した後半の部分がある程度書けているので早く書けると思います…はい

いや本当申し訳ない

太久郎「まあこれに懲りて精進するんだな、うん」

なんか作中と違って冷たくない？

太久郎「ん？　幸星と同じレベルで接してるだけだが？」

おいw

あいつと一緒にするなwww（↑何気にひどいこと言ってるのはご愛嬌w）

では感想、評価、質問、誤字脱字等よろしくお願いします

焼肉（メニュー）

「そろそろ次の注文取ろうぜ」

先ほどまでバクバクと食べていた幸星だが肉の量などが少なくなってきたのでそういうとメニューを開けた。

同じように太久郎も開いて見ている。

「どうするか」

「折角ちょっと良いコースにしたんだし、特上でも頼む？」

「そうだな」

悩んでいた太久郎だが、美幸に言われ特上の所に目がいく。

そしてまた好きなの頼めばいいかと思い特上を数品、その他を数品選んだ。

他の４人も意義がなしといった感じでＯＫしていった。

なので太久郎は店員を呼ぶためのブザーを鳴らそうとするが、

「これってなんですか？」

と太久郎の隣からフェイトがメニューに指差した。

そのため太久郎はブザーを押す指を一時停止。

顔をメニューに向けた。

そこには――「特上デラックスキムチ」と。

（（特上デラックスキムチってなんだよ……））

名前があまりにも酷いと思いフェイト以外は心の中で突っ込んでしまった。

フェイトがキムチってものを食べたことがなく、どんなのか気になったのでついでに一緒に頼んだ。

「フェイトちゃん、ドリンクもなくなったし、一緒に入れにいこ」

いつの間にかジュースがなくなっていたコップを見てなのははフェイトを誘う。

見てみるとフェイトのコップも同じようになくなっていた。

「うん」

フェイトもそれを見ていきたかったので快く承諾して、なのはとフェイトはドリンクのところに歩いていった。

「俺も行こかな」

幸星はズーとジュースを飲んでいたが、ジュースがなくなってしまったのでなのはと同じようにジュースを入れに行こうとする。

「あっ、ついでに俺のも入れてきてくれよ」

幸星が入れに行くのに気づいた太久郎は一緒に飲み物を入れてきてくれるよう頼んだ。

「めんどくさいなー。お前も来いよ」

「ついでだよ。ついで」

と少々渋る幸星だったが何か閃いたのか「仕方ないな」と言いながらも口をニヤニヤさせながらドリンクバーに向かっていった。

――――3分後――――

ここからは死角となるドリンクバーから持ってきたなのはとフェイト。

氷を継ぎ足し、新しいジュースを入れてきて美味しそうに飲んでいる。

二人が帰ってきたため幸星もそろそろ帰ってくるかなぁと太久郎は思っていたらちょうど幸星が帰ってくるのが見えていた。

「おっ、帰ってきた」

ジュースを適当に入れてきてくれと言ったので何を入れてきたのを確認するため幸星の持っているコップを太久郎は見た。

左手――さわやかな緑色。
たぶんメロンソーダであろう。

そして右手――何かわからない……
色を言えば緑と黒の中間くらいだろうか。
とにかく一種類のジュースでは出せない色だった。

（こいつ混ぜやがった！）

太久郎はそう頭の中で結論付けていた。
というよりもこれはそうとしかいえないであろう。

そして考えている間に幸星は戻ってきて、得体のしれないジュースを何食わぬ顔で太久郎に差し出してきた。

「はいよ。入れてきたぞ」

「……いやこれなんだよ」

「ジュース」

太久郎が幸星に聞くが平然と返してきた。
幸星はその間にも普通のメロンソーダをチューチュー吸っている。

「これ混ぜただろ？」

「混ぜたよ」

「子供か！」

これまた平然と返事してきたのでツッコミを入れるが、若干ずれているツッコミをしてしまう。

「なんで混ぜてくるんだよ！」

「いや～その方が面白そうだったから」

「面白いで入れてくるなよ！つかよく周りの目を気にせずにできたな」

「まあぶっちゃけ周りの目もあったけどな」

じゃあやめとけよと心の中でツッコム太久郎。

小学生ならまだしもこの年でそういう行動をするのはちょっと恥ずかしいものがある。

ましてやこんなに悪質に混ぜてくるやつなぞ見たことないであろう。

それなのに幸星という高校生は混ぜてきてしまっていた。

「つかどうするんだよ、これ……」

と目の前のいかにも不味そうなジュースをどうするか迷っている。

なのはやフェイトもこれには何とも言えなかった。

言ったとしても何も解決はできないのだから…

「……お前が飲めよ」

太久郎はこんなジュースは飲みたくないため幸星に押し付けようとする。

「いやいや、折角入れてきたったんだから。ちゃんと飲めよ。それに飲んでみたら美味しいかもしれないだろ？」

と幸星は言っているが顔はニヤニヤしているので説得力はなかった。

太久郎は幸星も飲む気がなかったので今度は美幸の方を見るが、美幸も一向に顔を合わしてくれなかった。

どうやら向こうは徹底的に無視する方針らしい。

そしてさすがになのはやフェイトに助けを請うのははばかれたので自分で飲むことを決心した。

「いくぞ……」

「がんばってください！」

「食事するのにエールを送られるって……」

げんなりしながらもストローからジュースを少しだけ吸い込む。

「……太久郎さんどうですか？」

なのはとフェイトが心配そうに聞いてくる。

「……こ、これはっ！」

「どうですか？まさか、美味しいの？」

「微妙に香るレモンティーに、苦味のコーヒー、アップルやオレンジの爽やかさに、さまざまな炭酸系、極めつけの乳酸飲料の甘さと酸っぱさ、そしてなぜかジュースでは味わえない甘辛い物がが何とも言えない――――」

「「何とも言えない？」」

「嘔吐物感を醸し出している！！」

「「最悪だね（ですね）！！」」

あまりの不味さに太久郎は咽（むせ）て、さらには涙目になっていた。

太久郎は口直しにただの水をグビグビと飲みほすと、ギンと目を見開いて幸星を睨んで言った。

「お前、何を入れたらこうなるんだよ！」

「えっと…オレンジ、コーラ、メロンソーダ、……」

と幸星は入れたものを順に挙げていく。

名前の中にはコーヒーミルクにするためのミルクや砂糖、果てにはなぜか焼肉のタレ数種類なども出していた。

「……ようするにドリンクバーと…『タレ』コーナーにあったところのやつ全部入れたってことか？」

「そうだな」

「よし、ちょっとO☆HA☆NA☆SHIしようか」

「ストップ、ストップです！」

「そうですよ。あとそれ私の台詞の気がします！」

幸星の悪ふざけに少し切れた太久郎だったがフェイトとなのはに止められていた。

二人に止められしぶしぶ引き下がった太久郎は仕方なしに再びお肉などを焼き始めていた。

ちなみに幸星は今席を外している。

なぜかというと先ほどのくそまずいジュース（ダークマター・ドリンク）を幸星に全て飲ませたからだ。

そのため幸星は涙目になりながらトイレに駆け込んでいった。

太久郎はそれを見て満足気。

なのはとフェイトはご愁傷様と手を合わせており、美幸に関しては「ほんと、男って馬鹿ねぇ」と呟きながらも野菜を焼いていた。

太久郎は暫くして、顔が青くなりながらも戻ってきた幸星とともに楽しく肉や野菜、海鮮系などを焼いていた。
しかし美幸がお肉などもうなくなってきているのを見て、ありことに気づく。

「ねぇ、さっき注文していたのまだよね？」

「そういえばそうだったな……」

少し遅いかなっと太久郎も美幸に言われてそう思い始めていた。

「店員を呼びましょうか？」

「そうするか」

なのはに言われ、近くに居た店員に手を挙げて知らせる。

「ご注文でしょうか？」

「あっ、いえ。先ほど注文したやゆがなかなか来ないんですけど…

…」

気持ちは丁寧に言った太久郎に店員は慌てて確認するとこう言ってきた。

「申し訳ございません。すぐにでもお持ちいたします」

そう言い残すと厨房の方に引っ込んだ。

（何か時間のかかるメニューでもあるのかなぁ）

そう思いつつも残り少ないお肉を焼いていた。

1分もしないうちに頼んだ料理が持ってきたのだが……今は持ってきてもらったのを後悔している。

それもそうだろう。

肉を入れる大皿になぜか山盛りのキムチが入っていたのだから。

「「……」」

これには全員無言になってしまう。

周りの席も見るとこちらのキムチを見てヒソヒソ話をしていたり、唖然となっていたりしていた。

「なんで、こんなにキムチが多いんだ？」

ようやく出した言葉だったが、今の状況を変えることはできない言葉であった。

「えっとですね、この『特上デラックスキムチ』が原因だと思います……」

最後は声がしおらしくなっていたなのはだったが、伝えたいことは伝わったであろう。

「うん、とりあえずこのメニュー作ったやつ馬鹿だろ」

と文句ばかり言っていていても無意味なので仕方なしにキムチに手をつける。

それを見て他の皆も手をつけ始まる。

というより全員が手をつけないといけない状況であった。

ここの店はバイキングで料理を残すと1人１００円の罰金が科せられるシステムがあり、この「キムチ」も残したら取られるのだ。

そして万が一残した場合……コースは竹でこのコースだと大人３人×（税込み）２４９９＋小人２人（税込み）１２３９円なのだがそこにさらに５００円加わるとこになる。

そうなると合計が１０４７５円となり一万円では払えなくなってしまう。

（残したら食い逃げになってしまう！）

幸星に言われ財布すらもってきていないため焦る太久郎。

他も冷や汗をかきつつも必死に食べている。

さらに言うとこれを食べ切っても先ほど同じく追加注文したお肉が残っているため腹が膨れ上がるのは確実であり、それ以上に全て食べきれるかわからなかった。

「と、とにかく早く食うぞ。時間が経てば経つほどそれだけお腹が満たされていくからな」

太久郎は全員に伝えている間もお肉を焼いて、無駄な時間を減らしている。

「（食い逃げにならないために）がんばるぞっ！！」

「「おおっ！！」」

この瞬間5人の間にはある種の絆が生まれていたのは確実であった。

その後太久郎、なのは、フェイト、幸星、美幸の5人の兵士はなんとか食べきり、お腹をパンパンに膨らませながらも無事に帰っていくことができたのであった。

その後ろ姿は歴戦の強者(つわもの)もようなオーラとともになぜか哀愁漂うような何ともいえないちぐはぐな雰囲気であったという。

ちなみにこの後5人は帰ったあと腹を壊してしまって大変だったというのはいうのは余談である。

行った焼肉店の前を通るどころかそのデパートにすら行きたくなくなったのも嫌になっていまったというのも余談。

後々焼肉する度にこの思い出を毎回思い出してしまうのも余談で

あった。

焼肉（メニュー）（後書き）

１４話目です

今回は

・焼肉店での馬鹿話ＩＮミックスジュース

・焼肉店での馬鹿話ＩＮ大食い

日曜日にリアルにバイキングのある焼肉店に行きました～

書き始めたのはもっと前ですけど、それをある程度参考にできて物語考えるの楽でしたわ～

あと途中わかる人はわかりますがちょっと生徒会からネタ取りましたｗ

ちょこっとねｗ

でちょっとアンケートです

でもここでのアンケートではないですｗｗｗ

いや次の短編なんですが

『らき☆すた』×『日常』

『生徒会の一存』×『緋弾のアリア』

のどっちがいいですか？ｗ

活動報告にも書きますけど一応ここでも…

まあもちろん後々両方書くつもりですし、別に答えてもらわないでもいいですけどねｗｗｗ

まあ参考にでもと思いましてｗ

では感想、評価、質問、誤字脱字等よろしくお願いします

勉強（スタディー）

金曜日。
太久郎達が焼肉にいった翌日。
太久郎となのは、フェイトはいつものように家でゆったりとしている――――

――――わけではなく。

今日は珍しく3人は一緒に勉強していた。

というのも太久郎が買った勉強用の教材を今までやり忘れており、今日はたまたま思い出し勉強をやろうということになったのである。

なのはは始める前はちょっぴり嫌がっていたが、学校に遅れないようにするためか始めてからは集中していた。

フェイトはというと勉強をするのが苦ではないのか始める前から平気だったのだが、国語を見てからは唸っていた。
話す分には問題なかったのだが、書き取り読み取りとなると言語が違うため苦戦していた。

「なのは、これなんて読むの？」

「どれ…ああ、これは『森』だよ」

今フェイトは小学一年生の漢字をやっている。
先ほどまで平仮名をやっていたのだが、思いのほか飲み込みが早かったので漢字をしているのである。

漢字はさすがに難しいのか先ほどよりペースは落ちてしまっているが、やはり平均より比べて覚えがいいのでなのはと同じ小学三の学力に追いつくだろう。

「フェイトちゃん、フェイトちゃん。ここってこれで合ってる？答えは『3』なんだけど」

「うん、合ってるよ」

そしてなのはの方は算数をやっている。

数学に関してはフェイトの世界もこちらの世界も形が違うだけで計算ややり方は変わらないそうだ。
形というのはローマ数字と漢数字の違いと思えばいいそうだ。

フェイトはリニスに習って、小学六年生までならすべてできるという。

そのためフェイトがなのはに算数を教えている。

お互いが教えあう形ができているため二人は成績が伸びることであろう。

一方でこの小説の主人公、太久郎はというと……

「んー……わからん」

一人唸っていた。

なのはやフェイトは小学生で太久郎は高校生であり、なのは達が太久郎を教えることは無理だからである。

そのため一人で勉強することになるのだが……

「さすがに高校生の問題になると難しいなぁ」

どうやら一人では限界があるようだ。

目下一番の悩みどころは英語と数学みたいで、他の教科に関してはほどほどにはわかるようであった。

「友達呼ぶにしては時間が時間だしな……仕方ないできるだけ調べて本当にわからないところだけ先生に聞くか」

「私達は教えることができませんかたね」

「そりゃ、、小学生と高校生だもんな」

なのはの冗談に太久郎達は笑っている。

とそこに

『それなら私が教えましょうか？』

不意にどこからか声がした。

……というより

「レイジングハート？」

『はい、なんでしょうか』

なのはに言われて素直に答えるレイジングハート。

「あの……レイジングハートって勉強できるの？」

『はい可能です。英語というものはどうやらこちらのミッドチルダの言語と同じのようです。そして数学も計算に関してはこちらの法則と変わりありませんから大丈夫ですよ。他のはこちらの世界のことを深く学ばなくてはいけませんから無理ですが』

「へぇー。凄いんだな、レイジングハートって」

レイジングハートの説明にただ関心する太久郎であった。

「つっことはバルディッシュもできるのか？」

『できますね。何なら私も教えましょうか？』

バルディッシュもどうやらできるようでバルディッシュも教えることが可能であった。

「うん、まあ二人もいるかわからないが……じゃあ両方頼むよ」

『了解しました』

「なのはとフェイトもいい？」

「かまいませんよ」

「私も大丈夫です。こういう時間なら必要なときはありませんし」

「二人ともありがとう」

太久郎はなのは達（レイジングハート達も含む）にお礼を言って、感謝した。

その後5人？は仲良く勉強していたがある一角だけ杖に教えてもらう高校生というシュールな光景になっていた。

だがさすが高性能な機械のためか勉強がはかどったのは言うまでもなかった。

次の日、太久郎は「あれ？　俺、先生役いらないくね？」と思っていたが、もちろんいらないかどうかは昨日の出来事を見ればわかりきったことであった。

勉強（スタディー）（後書き）

１５話目です

今回は

・勉強の話です

いや…一週間かけてこの短さ…

本当ダメですね…

今回の話はある作者様の感想からヒントを得たものですｗ

あとレイジングハートやバルディッシュは英語で

シュラーフアイゼンとかはドイツ語らしいですね

もし違ったら…独自解釈と思ってください（エ

では感想、評価、質問、誤字脱字等よろしくお願いします

野球（スポーツ）

土曜日。
平日とは違い午前中に学校が終わるのだが、部活動をやっている人には関係ない。

そして同じく野球部に所属している太久郎なのだが、今日野球部の様子がちょっと違っていた。
というのも今日は他校との練習試合なのである。

そのため今太久郎のチームは守備に回っている。

あと忘れられているかもしれないが太久郎は推薦された野球選手であり、そのためか太久郎はピッチャーである。
この学校はそこそこ強いのだがピッチャーが毎年弱くそのため今回太久郎が入ってきたことによりかなり強くなった。

一年でレギュラーは珍しいがピッチャーのライバルが少なかったためなることができたのだ。

「「太久郎さん、がんばれー！！」」

そして現在野球の練習試合なのだが、太久郎にある二人の声援が送られていた。

「……おい。なんで二人がここにいるんだ？」

二人……なのはとフェイトの声援は太久郎にとってはとても嬉し

いものだが、ここにいるという単純な疑問を幸星に聞いてみた。

「ああ、俺が呼んだからだよ」

「やっぱりか……」

最初から半分ほど犯人だと疑っていた太久郎だったがそれはどうやら当たりだったようだ。

「で、何で呼んだんだ？　他の生徒から変に思われるだろ……。つか今も他の生徒からの視線が痛いんだが……」

太久郎を知っている生徒は太久郎を応援しているなのはとフェイトに興味を持ちつつも、応援されている本人に目を向けている。

「この２人は誰？」とでも目を訴えているようであった。

「いやまあね、やっぱりタクが活躍しているところを見せてあげたいだろ？　俺は出れないけどタクにはがんばってもらいたいからさ」

「幸星……」

幸星の素直な気持ちに太久郎は嬉しかった。

「まあ実際は太久郎の反応が面白そうだったからから、呼んだんだけどな」

「……幸星」

さっきの言葉を撤回はしないがなぜか後悔していまう太久郎であった。

さらには太久郎が周りを見渡すといつの間にか他のメンバーも集まってきていた。

太久郎は一人暮らしだと聞いていたのにそれを応援に来ている小学生くらいの女の子。

しかも2人ともなれば興味がわかないわけないのだろう。

そしてその内の1人が太久郎に聞いてきた。

「あの子はなんなの？　さすがに気になって集中できないからさ。僕も皆も」

それに同意する太久郎と幸星以外の部活仲間。

先輩、後輩の間柄関係なく同じ興味を抱いていた。

「えっと……あの2人はですね……（おい！　やっぱりこういう展開になったじゃねぇか！）」

太久郎は部活仲間に迫られ冷や汗をかいているが、この状況を作り出した現況である幸星にアイコンタクトをさり気なく送くる。

「ん～、まあがんばれ？」

（おいいいい！）

アイコンタクトを受けた幸星は小さな声で返答する。

しかしそれはあまりにも無責任な言葉で、太久郎も心の中で思い

っきり突っ込んでしまっていた。

その後も太久郎は他の部員に迫られるも“従兄妹”ということで誤魔化した。

他の部員も事情があることを察したのかそれ以上は何も問いださなかった。

ちょうど試合が再開したのでそのまま練習試合に戻った。

時間が経ち練習試合が終わった頃。

「太久郎さん凄かったです」

「そ、そうか。ありがとう」
なのはに素直に褒められて太久郎は照れてしまった。

試合は無事に勝ち今は勝利したのを喜び合っている。
そして試合が終わったためなのはとフェイトをグランドの中へ招き入れていた。
「なんたってうちのエースだからね」
「なんでお前が威張るんだよ」
マネージャーである美幸は勝った嬉しさもあり、威張っているがそれを太久郎が突っ込む。
もちろん冗談だとわかっているのでなのはとフェイトは笑っている。

そうこうしているとその一角が華やかだったため野次馬が集まってきた。
野次馬もとい野球部員（幸星含む）の皆さんだ。
「それがさっきタクを応援していた従兄妹の2人か？」
「ええ、まあ」

部員の1人が尋ねてきたので頷く。

もちろん従兄妹ではないが先ほどそういう設定になってしまったのでそう頷くしかなかった。

事前になのはとフェイトには従兄妹という設定にしてあると伝えているため部員に言われても何の疑問も抱かなかった。

先ほども言ったが部員達も太久郎たちの事情があることを察してか従兄妹という設定には追求しない。

「しかし……タクの従兄妹にしてはやたらと可愛いな……お人形が動いてるみたいだ」

「あ、ありがとうございます」

太久郎の先輩の1人から可愛いと言われ、なのはは顔を赤くして照れていた。

同じくフェイトも顔を俯いて赤らめていた。

太久郎は「一言余計だ」と言っていたが全員無視。

「ん……よし！　リア充1人だけには勿体無いから『なのはとフェイトを愛でる会』を発足しようぜ」

「「「賛成！！」」」

「おい、待て。そこの部員共。あと誰がリア充だ！」

先ほどとは違う野球部の先輩はそう宣言すると他の部員も賛同し

ていた。
もちろんそれを聞いて太久郎は止めようとする。
そのときの先輩にもため口だったがもはやそんなことは関係なかった。
「別にいいだろ、愛でるくらい。このリア充が」
「そうだ、そうだ。独り占めはいかんぞ。リア充が」
「一年でエースになりやがって。リア充が」
「どうしてこうも数分で俺はアウェーになってるんですか！　しかも最後はリアルに嫌味ですね！」
こうも矢次に攻撃され太久郎のダメージがでかかった。
「うっし、タクはほって置いてなのはちゃんとフェイトちゃんと一緒に帰ろうか」
「「「賛成〜！」」」
「本当こういう時って団結力あるな！」
最後には野球部員の部長が鶴の一声でなのはとフェイトと「一緒に」帰ることを強制的に決定した。
「よし、じゃあ行こうな。なのはちゃん、フェイトちゃん」
「ふぇ？　でも……」

「ほら、フェイトちゃんも」

「え……えっと……」

「おい、こら待てや！」

野球部員の面々（太久郎以外）はなのはとフェイトは校門の方に向かって歩き出す。

太久郎は本格的に口がなっていなかったが、向こうも向こうなので仕方ないだろう。

太久郎は置いていかれそうになり、急いで帰りの支度をし一緒に帰った。

帰り道。

一部の野球部員は逆方向のため少し減ったが、それでも大人数であり太久郎やなのは達を中心にとても良い雰囲気で帰っていったという。

野球（スポーツ）（後書き）

１６話目です

今回は
・野球の試合
・野球の試合後

今回は太久郎の部活…しかも練習試合の出来事

何気になのは達は初めて太久郎の高校に来ましたねｗ

しかし太久郎の野球部仲間…馬鹿だなぁｗ
幸星があれだったからだいたい検討はついてたけどｗ
しかもこういうときの団結力だけは凄いという（笑）

まああくまでポジションはモブですけどねｗ

ここのオリキャラメインはたぶん太久郎、幸星、美幸の三人しか出てきませんね

では感想、評価、質問、誤字脱字等よろしくお願いします

対決（マッチ）（前書き）

これが作者の全力全開！

対決（マッチ）

日曜日の早朝。

まだ誰もいない薄暗いくらいの公園で太久郎はいた。
そして近くには私服とは違う服装を着た少女がいた。
バリアジャケットを着たなのはとフェイトである。

2人の少女はそれぞれの杖を握り、対峙していた。

太久郎はそれを固唾を呑んで見守っている。

「いくよ、フェイトちゃん」

「いつでもいいよ、なのは」

それが合図だった。

2人は足を地面から離し、宙を飛び――――

――――そして交差した。

一度ならず二度ぶつかった。

だが力は互角のようで2人はお互い弾かれる形で距離を取った。

太久郎はこの光景に目を奪われている。

「ディバインシューター、シュート！」

しかしなのははただ距離を取るだけではなく同時に魔法を放つ。

桃色の球体４つが、フェイトに襲いかかる。

だがフェイトはそれを読んでいたかのごとく最小限の動きでそれを避けながらダッシュでなのはに接近してきた。

なのはもこれに驚き、魔法のコントロールを多少捨てて、プロテクションの魔法で自分自身を守ろうとする。

「ハァァァ！」

とプロテクションを張った直後、フェイトの刃がなのはを襲った。

「くっ！」

なのははバリアを張っているため、ダメージは通ってないがその攻撃に顔を歪ませる。

しかし

「ッ！」

フェイトは何かを気づいたようで、攻撃を止め上昇した。

その1秒後……なのはの魔力弾がそこを通過する。
そう先ほど放ったディバインシューターだった。
先ほどは驚いてコントロールを少し失っていたが、それを再びコントロールしてフェイトの背後から襲ったのだった。
けれどもフェイトは戦いの経験からかそれを察知して避けたのだった。

「あぁ……」
太久郎は一進一退の攻防に目を大きく開けながら心配しつつも――
――――感動していた。
なぜかはわからない。

その光景は通常ではありえないことからの驚きだろうか……
否、それは今まで経験してきた中で最高の美観だったことからの歓喜だろう。
それほどまでに2人の戦いは美しかった。
戦っているもの自身ではわからない。
客観的に見て初めてわかるものだった。

なのはとフェイトはその間にも2、3度ぶつかり合っていた。
時には攻め、時には守る。
本当に互角の戦いであった。

「ディバインバスタァァァ！」

時々なのははお得意の収束系の砲撃魔法をフェイトに打っているがフェイトに当たらない。
隙のでかい技では動きの速いフェイトにはなかなか当てることができないのだ。

『アークセイバー』

「ハッ！」

そしてフェイトはここで動いた。

ブーメランのように回転しながら飛行する光刃を発射する魔法でなのはを攻撃した。

さらにフェイトは打ち終わると、すぐにフェイトはなのはに向かって飛んでいく。

魔法と自身による二段攻撃。

いや

「打ちぬけ……ファイアッ！」

自身の飛ぶスピードより速い魔法（フォトンランサー）による三段攻撃。

連射して攻撃力を上げており、魔力弾は何発にも及ぶ。

おそらく秒単位による連続攻撃で決めるつもりのようだ。

いくらガードが硬いなのはでもこの三段攻撃では破られるだろう。

そして避けるようにも一回目はともかく、「フォトンランサー」とフェイト自身の攻撃では追尾されるのがオチである。

「それで決めるつもりだねフェイトちゃん……でも私も負けない！」

なのははフェイトの誠意に答えるように自身に改めて気合を入れ、そして行動した。

守るでもなく、上下に左右に避けるでもなくひたすら前へと。
迫ってくる攻撃に臆せず前へと。
フェイトはこれに驚きつつも、目は真剣である。

そしてなのはは迫りくる魔法（アークセイバー）を……

「！！」

避けた。

だがこれは守りの避けではなく、反撃するための避け。
攻めるための行動であった。

「ッ！」

しかしなのはも避けるのも完璧ではなく少し当たったらしくダメージが通っていた。

けれどもなのははそれくらいでは止まることはない。

避けるのと同時に魔法を練っていたため攻撃があたってしまったが、今はそれを発動させた。

「シュートッ！」

なのはの十八番の一つ、「ディバインシューター」だった。

だが先ほどとは違いフェイトの打った「フォトンランサー」と同じくらいの数を打っていた。

これでフェイトの二個目（フォトンランサー）の攻撃を相殺させる気だ。

そしてなのはの目論見通りそれはぶつかり合い、爆発した。

爆発による煙でお互いの姿は見えていない。

だがなのはもフェイトもそれに関係なく、まるでお互いの姿が見えてるかの如く突っ込む。

「「ハァァァ！！」」

お互い叫びながら突っ込む。

友達（ライバル）に勝利するために。

そして辺りに一度甲高い音が響いた。

太久郎は息を呑みながら、煙が晴れるのを待つ。
２人を心配しながらどちらが勝ったのかを確認するために。

そしてそこには宙でお互いの首筋にお互いの杖を寸止めしている形で止まっている２人の少女がいた。

「引き分けだね」

「うん」

２人はこの結果に満足しているようであり、とても清々しい顔をしていた。

なのはとフェイトは杖を下ろし、太久郎の元へ降りてきた。

「引き分けでした……どうでしたか？」

なのはは太久郎にこの結果を見て、また魔法を見てどうだったかを聞く。

もちろん太久郎は魔法については素人も同然のため、そんなにどうこう言えるものではないのだが聞いてしまうのは子供の性であろうか。

「あっ、うん。凄かったよ。俺の想像していたものよりもはるかに……素晴らしかった」

「ありがとうございます」

太久郎から褒められて、なのはは嬉しがった。

「試合の方も2人の実力は元々知らないけど、2人が満足したなら良いんじゃないかな。満足したんでしょ？」

「「はい！！」」

なのはとフェイトはお互いに顔を見合わせると太久郎の方に向き直り、元気いっぱいに返事したのだった。

ちょうどそのとき朝日が2人を照らし、2人は輝いて見えたという。

そしてその帰り道。

「そういや魔法ってあれだけなのか？」
「あっ、いえ。あれはまだ本気ではないんです」
「え……あれで本気じゃないの？」
太久郎は少し疑問に思ったことを聞いてみたのだが、予想外の答えが返ってきて驚く。
「本気出したら……？」
「たぶん、街が大変なことになるかも」
「私の魔法も……」
「……」
２人の答えに太久郎は黙るしかなかった。
太久郎は知らなかった。
２人の本気は結界の中でしかできないことを。
２人は奥の手を残しており、その魔法は結界を張る人がいない世界では「絶対」使えないことを。
「てかそれって魔法ではなくてむしろ魔砲……」
「「それは言ってはいけないことだと思います！」」

そうして3人は仲良く帰っていった。

対決（マッチ）（後書き）

１７話目です

今回は

・『対決』です

最近気づいたのですが作者はどうやらオチをつけたがるようですｗ
いらないのにねｗ

さてメインの部分ですが、たぶん最初にして最後になる（かもしれない）対決はいかがでしたでしょうか
戦いにしては少なすぎますよね…
でもぶっちゃけこれ以上は無理です…

表現とか難しいです！

そもそも「原作離れてるし、戦いもオリジナルで行こう！」ってやったのが間違いでした！
これ上手くできてるかさっぱりわからんｗ
オリジナルが故に、「これってできる？」感がはんぱないですｗｗｗ
結界張る人がいないのも難しかったです
ないために大技が打てない→見せ場が！ですからねｗ
打ったら街に被害がｗｗｗ

あと本編での補足…
本編で説明し忘れました…

Qいくら小さい技でも魔法が着弾したら被害出るのでは？
A大丈夫、少し街から離れてる公園だから

Qディバインバスターって…いくら離れててもこの技の被害は…
Aこれも大丈夫、上から下に打ってるのではなく、下から上に打ってるから着弾の可能性はないぜ
なのはちゃんも「あっ、ごめん。戦いに集中しすぎて街壊しちゃった。てへ☆」みたいなそんなヘマしませんｗｗｗ

いや本当この描写は入れるべきでしたよね…すみません

こんなダメな作者ですがこれからもよろしくお願いします

では感想、評価、質問、誤字脱字等よろしくお願いします

遊楽（エンジョイ）

公園から帰ってきた太久郎たち。

朝食を食べて、3人はくつろいでいた。

もとい暇していた。

というのも今日の予定は「早朝に魔法を見える」ということしかなく、昼どころか朝からの予定は全くないためである。

「暇だな」

「そうですね」

「どこが行きたいところある？」

太久郎はフェイトに行きたいところを聞く。

『～♪～♪』

だがタイミング悪く太久郎の携帯電話がなる。

メールではなく電話のようだ。

電話の相手を見て太久郎は不機嫌になりつつも電話に出た。

「もしもし。魚の骨を咽に詰まらせたらいいと思う」

『え！？　なんでだよ。俺だよ、俺』

「家にはお金なんてありませんよ」

『オレオレ詐欺じゃねぇよ！　篠寺だよ。電話で相手表示されるんだからわかるだろ』

太久郎は相手がアレ（幸星）だったので少し暴言という名のボケを吐きながら電話に応対していた。

なのはとフェイトはこのやり取りに苦笑いをしている。

「はいはい。で何のようだ？」

『いや、姉貴がな、どうせ暇だろうからなのはちゃん達と一緒に遊びに行かないかってさ』

悪くない提案だった。

ちょうど太久郎たちは暇していたところだった。

「なるほど。で、どこに行くんだ？　まさか決まってないわけじゃないだろうな？」

『いや決まってるよ。行くところは《ふれあいわくわくパーク》だってよ』

「ああ、あそこか」

《ふれあいわくわくパーク》とはペットを連れてきて遊べる運動公園と動物園を足して二で割ったような施設だ。

動物園と言ってもレアなのはいないが、ポニーやヤギなど比較的大人しい動物が多くいるところである。

「確かにあそこならバスでちょっとバスに乗って行けるからな」

『だろ。なのはちゃん達もなんだかんだ言って小学生だしな』

「わかった。じゃあバス停に集合して、そこから向かうか」

幸星はＯＫと言うと電話を切った。

太久郎はそれを確認したら電話を置き、なのは達に話した。

場所を聞いたなのはとフェイトは一つ返事で頷き急いで準備を済ませ、そして太久郎と共にバス停に向かった。

「おっ、来た来た」
太久郎となのは、フェイトの3人はバス停で幸星と美幸を待っていた。
2人はちょうどやってきたようだ。
「お待たせ。待った？」
「いえ、待ってないですよ」
「俺たちも少し前にきたところだな」
「そうか……とちょうどバスも来たし、乗ろうぜ」
幸星はバスが来たことを知らせ、他の4人を乗るように諭す。
バスに乗った5人は二人用席の前二つに太久郎以外が座った。
「しかし俺らも行くの初めてだな」
「そうなのか？　お前らなら近場だし行ったことあると思ったんだが」
幸星の言葉に太久郎は意外そうな顔をする。
「あそこ最近できたのよ。それにこの歳でねぇ……彼氏もいないし」
太久郎はこちらにスポーツ推薦で来たのでそういう事情は知らなかったためそれに納得した。

「でも本当楽しみです」

「私も……私こういうところに行ったことなかったから」

なのはとフェイトは年相応にわくわくしているようであった。

とくにフェイトは過去に行ったことがないらしく、一見落ち着いているようであったが少し饒舌になっていた。

しばらく5人は仲良く話しており、バスに揺られること数十分で目的地に着いた。

「着きましたね」

「そうだな。しかし想像以上に広そうだな」

まずバスから降りたフェイトと太久郎。

太久郎は園を見て驚嘆の声を上げた。

自分の思ってたものよりも広かったからである。

「まあ確かに広いけど、ゆっくりしていったらいいんじゃない？

まだ昼前だしね」

美幸はそう言うと、入場ゲート前にあるチケット売り場に向かっていった。

「まずはどこから見て回るか」

「近くからでいいと思いますよ。それこそ時間もありますし」

「それもそうだな」

太久郎は地図を見てどこに行くか決めようとしたがなのはに言われそれで承知する。

実際太久郎はなのはやフェイトの行きたいところを優先させたかったが、なのはがそう言ったので追求はしないことにした。

その間に美幸が戻ってきた。

美幸からチケットを受け取り5人は園内に入っていった。

「わぁ、可愛い」

「ふわふわしてます」

まず5人が来たのはゲートの近くにあった<猫々ハウス>というところである。

保育園のような家に、さまざまな猫用の遊具、寝る用の毛布入りバスケットなどなどが置いてある。

そしてもちろんそこに主役である猫達が思い思いに過ごしているのである。

なのはとフェイトはそれぞれ猫を捕まえて、もふもふしていた。

なのは曰く「友達に『猫ハウス』と呼ばれるほどの猫を飼っている家があるそうなので、猫の扱いには慣れている」とのこと。

太久郎もそれに関心し、なのは達と同じように猫をもふっていた。

「肉球もぷにぷにしている……」

太久郎は肉球を触ってうっとりしている。

太久郎も動物が嫌いなわけではなく、暇な時の過ごし方としてはそれほど悪いものではない。

「確かに気持ち良いわね……でもここの猫って全然暴れないわね」
「慣れてたりするからだろうな。接客用の猫みたいな」
美幸と幸星も同じように猫を一匹づつ抱きかかえて触っていた。

太久郎は人馴れした三毛猫の一匹を抱え上げながら、軽く視線を周囲に向ける。
篠寺姉弟は一匹の肥満気味の猫に猫じゃらしでちょっかいをかけている。
なのはとフェイトはつぶらな瞳の子猫と同じ目線で見詰め合っていた。

「ちっちゃくて可愛いね」

「うん……ちょっと抱き上げてみる」

肘を付いたままフェイトはゆっくりと手先を子猫に伸ばしていく。
しかしフェイトがその子猫に触れるよりも早く、逆に子猫の方がとてとてと彼女の方に歩いてきた。

フェイトはお尻を上げて肘をついた姿勢なのだった。
だから当然その服の襟は重力に引かれて垂れていた。
そのため小学生のためあれがなく、その襟の下にはぽっかりと空間が空いている。

さらに猫というのは狭い空間に入り込むのが好きな生物であって――――つまり。

すぽん、とその子猫はフェイトの襟から胸元に飛び込んだのだった。

「はわわわ！？　えっ、どこに、んあああ、私のむ、胸に。ひゃひゃ、くすぐった……い」

フェイトは笑ったり顔を赤くしたりおかしな吐息をしたりして大騒ぎしている。

フェイトの服の胸部が子猫の動きに応じてわさわさ揺れており、フェイトもなのはも襟から手を突っ込んで必死に子猫を救出しようとする。

「ちょっと大丈夫？」

とその騒ぎを聞きつけた美幸がフェイト達に寄ってきた。

そして恥ずかしがるフェイトの襟の中に手を突っ込み一匹の子猫を救出したのだった。

なかなか取れなかったのは慌てていたからで落ち着いていた美幸からすれば簡単に取れたのだった。

フェイトが少し落ち着くのを待って美幸は話しかけた。

「さっ、次行きましょうか」

「え、でも……」

「良いのよ、アレは別に」

アレと呼ばれた人は2人いた。
何の罪もないのにフェイトの声を聞かせないため美幸の超人的な力によって沈められた雄2匹(太久郎と幸星)を尻目に3人の女の子は次の場所へと向かっていった。

※その後2人は5分後に復活しました。

遊楽（エンジョイ）（後書き）

１８話目です

今回は
・園内に入る前の前座
・そして園内の出来事前編

すみません、また遅れました…
本当はもうちょっと早くできてたんですけど、良いところで風邪を引いてしまって…

次は早く投稿できるといいなぁ～
てか早くしないと受験の関係でまずい…
予定では１１月までにとりあえず無印編を完結さしたかったのですが…間に合うのかどうか微妙なところ
……まあとにかくがんばりますかｗ

さて今回は見てわかるとおり前後編に分けさせてもらってます
園内に入る前のやつはオリジナル（といってもある部分だけはパロですがｗ）ですが後編は今やっているアニメ、シーキューブのオマージュです
オマージュなんですが電撃文庫Ｍａｇａｚｉｎｅの最新号の一冊前の話なんでまだ単行本に未収録です
次回は完全にオリジナルになるのでどうなるのやらｗ

では感想、評価、質問、誤字脱字等よろしくお願いします

動物（アニマル）

5人が次に来たのは<ワンパクパーク>というところ。
犬の『ワン』と『ワンパク』をかけた名前からするとどこにでもありそうな場所である。

そしてもちろんここの主人公はたくさんの種類、たくさんの数の犬たちである。
チワワやレトリバーとさまざまな大きさの犬たちと一緒に遊んだり、走り回ったりできる屋外の施設である。
地面は芝生であり、広さもかなり広くなっている。

太久郎達の5人はその入り口にいた。

「わぁ、やっぱりたくさんいますね。可愛い」

「そういう、場所だからな。あと自分の家の犬をここで遊ばせることもできるらしいぞ」

「それで園内にもペット連れのお客が多かったんですね」

なのはは太久郎と話しているが目を合わしていない。
目は目の前にいる犬たちに注がれている。

早く遊びたいのであろう。

太久郎はそのなのはの様子に少しため息を吐いて言った。

「いいよ、行ってきて。俺たちを気にしないでさ」

太久郎のその言葉を聞いたなのははすぐに駆けていった。
フェイトも同じように犬の方に走っていった。
「やっぱり子供なんだなぁ」
「何じじ臭いこと言ってるんだよ」
「そうよ。私たちも行くわよ」
太久郎も幸星と美幸に連れられ同じく犬たちの方に触りに行った。

「おお、可愛いな」
「可愛いわね」
「……おい」
1度目の幸星の声に太久郎と美幸は無視する。
「こいつも見た目よりふさふさしてるな」

「こっちは肉球が良いわ～」
「おいっ！」
「「何（よ）（だよ）」」
2度目の呼びかけで2人はやっと幸星の方向を向いた。
「いや、俺だけなんでこうな、イテッ！」
幸星は犬に腕を噛みつかれていた。
噛んでいるのは一匹の柴犬だけだが、他の大小の犬たちも幸星に向かって咆えていた。
「あの大丈夫ですか？」
「大丈夫だ、問題ない」
フェイトが少し心配して幸星に聞いた。
だが幸星はどうやらエ〇シャ〇イネタを出すくらいには大丈夫なようだ。
いまだに腕に噛みつかれているが。
「普段から人間に懐いている犬だから普通は噛みつくことはないんだけどなぁ……お前嫌われているんじゃねぇの？　他の犬にも咆えられているし」
「何で俺だけ……」

他のお客にしても誰も咆えられているものもいなく素直にへこむ幸星。

「あとはあれだ。お前からはコメディー臭しかしないからだ」

「コメディー臭って何！？　しかもへこんでいるときに追い討ちとか」

太久郎のまさかの追い討ちであった。

「ほら、大丈夫？」

「姉貴……」

「あっ、犬たちのことね」

「うん、その返答だと思った！」

美幸も普通に酷かった。

幸星はさすがに堪えたのか近くにあったベンチに座りに行った。

「幸星さんは大丈夫でしょうか」

「ああ、大丈夫だって。あいつもちょっとしたら治るからさ」

「でも結構へこんでますよ」

なのはに言われて改めて幸星の方を向くと、そこには負のオーラ

が出ていた幸星がいた。

「……まあ次の場所なら大丈夫だろ。猫のところでは大丈夫だったし」

太久郎は幸星のことについてこれ以上考えるのは諦めたようだ。

しばらく幸星を除く4人はたっぷりと犬たちを堪能して、次の場所へと向かっていった。

そして次に来たのは<メーメー牧場>というところ。

名前からわかるように羊と山羊が主役のようである。

6、7割は白で埋まっており、残りの3、4割は色が違う山羊、

羊たちで埋まっている。
季節によっては羊の毛刈りも体験できるようだが、残念ながらこの時期ではなかったようだ。

そして5人はその牧場の中にいる。
「羊や山羊がいっぱいいるな」
「そうね。羊とかならニュージーランドとかにいるんでしょうけどね」
「まっ、ここは日本だからな」
高校生の3人は話しながら、入り口の方から山羊や羊の群れに歩いていく。
なのはとフェイトも3人の後ろから歩いてついてきている。
なのはとフェイトは犬や猫と違い少し怖がっているようで、歩くペースは少し遅い。
そのため前の3人もそれに合わしてゆっくりと歩いている。
だがそれも時が解決することで、5人は羊たちの前に来ていた。
「ほら、大丈夫だって」
なのはとフェイトはやはり怖いのか後に一歩ほど下がって触ろう

としない。

仕方ないので太久郎、幸星は先に触れた。

「お、けっこうなかなか感触が良いな」

「だな。ギトギトしてるのは何でだ？」

「なんか羊の毛には油が出てるらしいぞ」

太久郎は幸星の質問に答えながらも2人は各々の感想を述べる。

なのはとフェイトはそれを見て、さらに美幸に後押しされて手を伸ばして触る。

「「わぁ」」

2人は初めての感触に笑みが零れる。

「確かにふわふわですけど、ギトギトしてますね」

「そうだね」

それで慣れたのか2人は山羊の方にも触ったりしていく。

（大丈夫そうだな）

2人の様子を見て太久郎は安心する。

そして太久郎はなのは達と同じように山羊を触りに行こうとするが視界の端にあるものを見つけた。

「動物の餌か……」

それは動物のおやつ（ここでは羊と山羊の）であった。

太久郎はそれを視界に収めると、その方向に歩いて取りに行く。

（これでさらに慣れてくれればいいな）

太久郎は善意で取りにいき、すぐさま戻ってきた。

「はい、どうぞ」

「これって山羊たちの餌ですか？」

太久郎は戻ってくるとなのはとフェイトにそれぞれ餌を5枚づつ渡した。

１００円払うと１０枚出てくる煎餅型の餌である。

「そうだよ。羊か山羊にあげてごらん」

なのはとフェイトはそう言われると羊たちに餌を差し出す。

すると山羊や羊はそれぞれの煎餅型の餌に噛り付き始めた。

「わぁ」

「凄いです」

２人はその様子に嬉しさが増す。

緊張もかなり解けたようだ。

――――しかし

「え？」

「ふぇ？」

２人の抜けた声によって太久郎もその状況にようやく気がついた。
周りにいる羊や山羊は全てなのはやフェイトに向かって迫っていることを。

理由は簡単である。
ただ餌が欲しいだけであろう。

だがそうだとわかっていても『全て』の山羊や羊に見つめられ、迫られるというのは小学生にとっては恐怖でしかない。
実際太久郎もこれを経験すると高校生でも怖いものに違いなかった。

「ひっ……」

「うっ……」

なのはとフェイトはこれに小さな悲鳴をあげ、餌を放り出して太久郎達の後ろに隠れてしまった。

羊たちもやはり餌にしか興味なかったのか、なのはやフェイトを追いかけることもなく餌を食べていた。

太久郎達はこれ以上怖がらせないためにその牧場の外に出た。

「ごめんな。俺が余計なことしたから……」

「いえ、太久郎さんのせいではないですよ。私たちがちょっと驚いただけですから」

太久郎は謝るがなのははすぐに否定した。

気にしていないようだ。

「そうか……ありがとな」

その後も5人は夕方まで園内で動物とふれあいながら遊びつくしたのだった。

おまけ

帰る前の園内にて。

「わぁ、フェレットだ」

「そういやなのはのところにもフェレットがいるんだっけ？」

「はい。お友達です。なぜか喋りますけど」

「……それ本当フェレットなのか……？」

もちろんそのフェレットは人間であるということを彼らは知らない。

動物（アニマル）（後書き）

１９話目です

今回は
・犬
・羊＆山羊
・おまけ

なんとざっくりなｗ

少しでもなのは達のかわいさを引き出せたらいいな～と思いつつ書いてたら…あれ？
なんか前半は幸星に取られてしまったｗｗｗ
まあ完全にギャグですけどねｗ

後半は自分や家族の経験からですね
知ってます？
奈良公園の鹿って凄く怖いんですよｗ
ちっさいお子さんは結構怖いらしいです（かくいう自分も昔泣かされたらしい）
妹も昔泣かされましたからね～
おやつ持ってたら大量に迫ってくるんですもん…そりゃ怖いよｗ
本当奈良公園の鹿って貪欲ですｗ

でもおやつを売っているおばちゃんとかには寄り付かないんだよな～
なんでだろうか？

まあ今回は鹿でなく羊や山羊にしました

そっちの方が都合よかったんで

あとちょっと残念なお知らせが…
急遽この小説をあと数話で終わらせると思います
というのも前回でお話した通り受験で…ちょっと問題が起きまして…
さすがにリアルをおろそかにできないので…

なので一話くらい日常を入れて最後に最終回を入れると思います
本当なら二人の魔法少女（ｒｙが今日曜日なので平日全部に日常話入れたかったのですが…すみません

しかし受験終わったら最終回後にまた再開するかもしれません
A'ｓ編とか本当はやりたかったのがあるので
はやてとか一回も出ずに終了とかあれですからねｗｗｗ

では感想、評価、質問、誤字脱字等よろしくお願いします

学校（スクール）

それはある日のこと。
何気ない昼には少し早い時間である。

「ふぅ、疲れた」

「お疲れ様」

いつものように魔法の朝練（あされん）を終えて帰ってきたなのはとフェイト。
疲れた体を座って休ませる。
２人は若いので少しでもくつろげば疲れが取れるだろう。

しかしなのはが台所にある物を見つけて体を起こす。

「あっ、太久郎さんお弁当忘れてる」

「本当だね」

そうそれは太久郎の弁当だった。
太久郎は朝急いで出て行ったため忘れていったようである。
また毎日ではなく、時々作っているためそれも拍車をかけたのだろう。

なのはは少し考える素振りを見せるとフェイトに言った。

「これ……届けようか」

「うん」

なのはが率先して準備（といっても太久郎の弁当と鍵をかけることだけ）をして出かけるのであった。

学校の４時限目。

学生であればほとんどの人が体験したことのある一番お腹が空く時間。

だがその時間も終わる時が来る。

キーンコーンカーンコーンと学校中にチャイムを響かせて、昼の休憩の時間に入ったことを告げる。

先生が出ていったのを確認すると、背伸びしたり弁当を拡げたり、またお喋りしたりと勉強の解放からくつろぎだす。

「ん……昼休みだな」

もちろん太久郎もその1人である。

先ほどの時間は苦手な英語だったので終わったときは一際嬉しいものだ。

「ふ～やっと終わったな……。購買行くか」

近くの席である幸星が同じようにリラックスしながら話かけてきた。

「いや今日は弁当なんだ」

「あっ、今日は弁当か」

幸星も本当に時々だが弁当を持ってくることは知っているのでとくに疑問も持たず納得した。

「さてと……ん？」

「どうかしたのか？」

「えっと……弁当忘れた……」

「あ～どんまい」

自分のかばんに手を突っ込み弁当を探した太久郎だが、そこには無情にも弁当はなかった。

それにへこむ太久郎。
それを見た幸星は少しばかりの慰めをかけていた。

「しゃーね。弁当はもったいないが家にあるが、どうしようもないしな……大人しく購買でなんか買うわ」

「そうか。じゃあ急いで行こうぜ。こうしゃべってる間にも人気のやつは無くなっていくからな」

「そうだな」

たまに作る弁当を忘れてしまった。
いやむしろたまにだからこそ忘れてしまった太久郎だったが、くよくよしていても仕方ないと幸星とともに購買に行くことに決める。

だが……

「鈴木くーん」

「ん？」

教室の入り口からあまり見覚えのない女子が呼んできた。
太久郎は知らないがその子は二つ隣の教室の子である。

「ん？……んッ！？」

よく見ると教室の入り口には人だかりができていたが、それ以外

に注目する。
人だかりの中心（原因ともいう）――――それはなのはとフェイトであった。

なのはとフェイトは家に出た後、学校を目指す。
少し迷いながらも学校に無事に着いた。

さらにこの学校の子に太久郎のところに案内してもらった。
案内した子も始めは小学校であろう子が高校に何の用事だろうかと思っていたがそれも太久郎本人に聞けばわかるだろうと、好奇心を抑え親切心で案内したのである。

だが学校というのは排他的とまではいかないまでも普段は見れないものには興味をわくものであり、何より本人の2人はとても可愛らしいので目立たないわけがなかった。

そしてあのたくさんの人だかりができていたわけである。

「はい、これお弁当です」

「おお！　ありがとうな。大変だっただろ。……主に学校で」

「いえ、そんなことないですよ」

太久郎はなのはとフェイトからお弁当を受け取る。
なのはは少し苦笑いで返したが、あまり気にしてないようだ。

現在太久郎、なのは、フェイト、さらに篠寺姉弟の今ではお馴染みメンバーは屋上に来ていた。

理由は先ほどの学生もとい野次馬である。
先ほどの状態ではまともに食べるどころか話すこともできなかったためにここに避難してきたのであった。

もちろんその場しのぎにしかならず、教室に帰ったら質問責めにあうのは確定であろう。

「じゃあ俺は何か購買で買ってくるぜ」

「おう。……そういえばなのはやフェイトは弁当持ってきてるのか？」

「いえ、渡したらそのまま帰るつもりでしたから……」
太久郎はそれを聞いて少し考えるとすでに立ち上がっていた幸星に言う。
「なんか適当になのはとフェイトの分も買ってきてくれないか？」
「ああ、いいぜ。ただで出遅れてるからな、ダッシュで行ってくるわ」
「おう」
なのはとフェイトはこれに少し驚いたが、次の瞬間には常の状態に戻る。
それは太久郎の普段の行動からのなれであろう。
さすがに1週間以上一緒に暮らしていれば太久郎がどんな人かわかってくる。
だから2人はこういうのであった。
「「ありがとうございます」」

その後幸星が戻ってきて5人は弁当を（なのはとフェイトは幸星の買ってきたパンを）食べながら楽しく雑談をした。
昼休みギリギリまで一緒に話しててなのはとフェイトが帰るときにはやはり一悶着があったが楽しいひと時だった。

――――そう楽しいひと時だった。

学校（スクール）（後書き）

２０話目です

今回は

・学校にて

いや遅れて申し訳ないです…

他のを投稿＆時間ががッ……

さて次回からは一応最終回に向かっていきます

次回で終わるか最終回を二話に分けるかはまだ書いてないのでわからないですが…

最終回は元々脳内にはあったんですが…果たしてそれを上手に書けるのか…

では感想、評価、質問、誤字脱字等よろしくお願いします

日常（デイリー）

４月某日。時間は午前。

その日も太久郎は学校に行って、なのは達は魔法の訓練をしており、何の変哲もない日常――――

――――であるはずだった。

「そこの2人練習しているところ悪いが……君たちは『高町なのは』と『フェイト・テスタロッサ』か？」

なのはとフェイトが後ろを振り向くとそこにいたのは黒い服を着た少年がいる。

「どうやらそのようだな……『時空管理局』のクロノ・ハラオウンというものだが少し一緒に来てもらえないか？」

その質問の答えは任意ではなく強制であることが伺える口調であった。

その日なのは、フェイト、太久郎の日常が終わりを告げる。

夕方、太久郎はなのはとフェイトからの電話を受けクラブをせずに学校から急いで帰宅した。

そこにいたのは1人の少年と……なぜか宙に浮いているモニターだった。

（……凄い未来的なモニターだな）

と思いつつもそういう空気ではなかったので何も言わず座る。

太久郎が座るのを少年が確認すると話し出した。

「そこの2人はもうすでに知っているだろうが、改めて紹介する。僕は時空管理局執務官クロノ・ハラオウンというものだ。そしてこちらが……」

そこでクロノと名乗った少年はモニターの方に目を移す。

『私は時空管理局提督「アースラ」の艦長、リンディ・ハラオウンです。事前にそこの2人から話は聞いてるわ。男1人で偉いわね～』

「かあ……艦長」

が話をそらしそうだったのでクロノは注意しようとしたが呼び方を間違えそうになる。

名前からもわかっていたがやはり親子のようだ。

『わかってますよ。……本題に入りますね。そこのお2人、なのはさんとフェイトさんですが2人はロストロギアであるジュエルシードで次元漂流者となりこの世界にたどり着きました。そのため帰れなくなったそうですが――――私たちの船を使えば元の世界に帰れます』

3人はそれをしかと聞いた。

しかし3人の顔は素直に喜びの感情を表してない。

なのはとフェイトは寂しさと困惑、太久郎はただ寂しそうな顔をしている。

管理局の2人はそのまま話を続ける。

「でその元の世界だが2人の関係者である……」

「あっ、ユーノ君は!?」

「母さんにアルフは!?」

なのはとフェイトはクロノの言葉をさえぎってそれぞれ心配をする。

『お2方は無事です』

「「「ッ！！」」」

そこでリンディが『3人』ではなく『2人』と言ったことになのは、フェイト、そして太久郎はまでもが絶句した。

『2人はこちらで保護していますのでなのはさん達の世界で起きた事件の全貌をお話してそのあとにこちらの船に来たときにあわしてあげます』

2人は消えたあとユーノもアルフも苦労していたこと。

クロノ達が向こうの地球に来るまでジュエルシードをなかなか封印できなかったこと。

フェイトの母である「プレシア・テスタロッサ」が隙を突いてジュエルシードを半分強奪したこと。

時空管理局であるアースラが勢力をあげてプレシアを取り押さえようとしたこと。

そして――――

――――フェイトが「アリシア」というプレシアの本当の娘のクロ

ーンであることも。

「なっ、クローンだと……？」

それは日常生活ではゲームやアニメくらいでしか馴染みのない言葉であった。

これを聞いたフェイトは涙を流しながら魂が抜けたように倒れる。

それを太久郎が驚きながらも体を支える。

フェイトを床に寝かせると太久郎はクロノとリンディに怒り散らすように問い詰めた。

「それはどういうことなんだよ！」

もちろんこの2人を怒るのはお門違いだってことはわかっている。

だがこれには怒らない方がおかしいだろう。

「そうだ。フェイトの母親……プレシアってやつはいないのか！」

だからこそフェイトの母親から直接答えを聞きたかった。

だが……

「……言っただろ。先ほど2人は保護していると」

「まさか……」

クロノは少しためらいがちになりながらも言った。

「プレシア・テスタロッサは行方不明なんだ」

『しかも「虚数空間」という魔法が使えない空間に落ちたから捜索不可能なのよ』

「そんな……」

これには太久郎はどうすることもできなかった。

フェイトの母親に息巻いて言おうとしたことは実際にいなければ何もできないのだから。

怒りの矛先はフェイトに悲しみを残して消えた。

その事実によりこの場に暗い沈黙が降りる。

しばらく沈黙を保っていたが口を開いたのは意外にも先ほどまで倒れていたフェイトだった。

「今考えると私の母さんは『私』を見ていませんでした」

まだ顔は優れないが母親（プレシア）から直接言われていないため、現実味が薄くショックも少なかったようだ。

４人はフェイトの言葉に耳を傾ける。

「それでも私には母さんによって生まれました。……だから私は母の分も生きようと思います」

「フェイトちゃん……」

フェイトはここにいる全員に言った。

「生きる」と。

フェイトはこの世界に来て戦うこと、母親の言うこと以外にもたくさん関わってきた。

友達になって、一緒に遊んで、楽しく訓練して、学校に行ってみたりと……。

フェイトの心が変わったのではない。

フェイトの心に他の心が加わったためにこういうことが言えたのである。

「フェイト……がんばれよ」

「はい！」

太久郎はとくに長い言葉はかけなかった。

もうこのフェイトには一言で十分だと判っていたから。

『じゃあ、状況も落ち着いたところでアースラに行きましょうか』

「……ここでお別れか」

「何言ってるんだ？　君も一緒に来るんだぞ。それに別れって言っても向こうとこっちで往復できるだろ」

「「「え？」」」

クロノの言葉に3人は思わずきょとんとしてしまった。

「それって本当なのか？」

それもそのはず。

元の世界に戻ったらこっちにはこれないのだと思っていたからである。

「当たり前だろ」

「「「……そういうことは最初に言ってよぉぉぉ！！！」」」

アースラの2人は最初から1時の別れだと知っていたため言わなかったのだが……3人はそれに気づくはずもなかった。

「ん～」

「おはよう、フェイト」

「お兄ちゃん《・・・・・》、おはようございます」

「アルフ《・・・》はまだかい？」

「まだ寝てるよ」

太久郎はアルフの寝ている部屋を覗くと、おへそを出し、口をだらしなく開けているアルフがいた。

「じゃあ起きるまでに朝ご飯用意しとくか」

「うん」

アースラの2人が来たあとなのはとフェイトは無事に向こうの地球に帰還し、アルフやユーノ達にも再会した。

なのはとユーノはそれぞれの家に帰った。

だがフェイトとアルフは違う。

２人は親を亡くし、家まで無くなってしまった。

ジュエルシード事件でフェイトはプレシアに加担していたとフェイトの口から供述していたが、太久郎の説得と証拠の映像もなかったため不問とされた。

もちろんこれは太久郎の力ではなく、クロノやリンディのおかげであったのは言うまでもない。

アルフもプレシアから無理やり脅され、さらにはその生傷からそれが証拠として不問となった。

話を戻そう。

２人はその事件で困っていたが、そこで太久郎の一言。

「俺の家族になろう」

理由は単純だった。

２人をほっとけなかった。

そのため太久郎は両親に今までのことを話し、掛け合い、説得して――――

――――フェイトを養子として太久郎は義理の兄妹となった。

「ふぁ～、おはよう」

「おはよう、アルフ」

「おはよう、ねぼすけさん」

「うるせー」

今起きてきたアルフも加えて3人は朝食を取りはじめた。

「今日ってなのは達と会う日だっけ？」

「そうだな。なのはと会うのは久しぶりだからな」

「私も久しぶりで楽しみです」

フェイトは髪につけているピンクのリボンをいじりながら言う。

なのはの方も長い間家を留守にしていたため家族から心配されさ

らに魔法のことも話した。
さすがに誤魔化すのは難しかったようだ。
もちろんユーノのことも話し、アリサやすずかにもちゃんと話している。

「じゃあ、昼に来るだろうから向かいいれる準備をしないとな」

「そうですね」

「あたしも手伝うよ」

「邪魔とつまみ食いはするなよ？」

「そんなことしないってば！」

太久郎は冗談だとわかっているので笑い出す。
他の２人もそれにつられて笑っていた。

（ああ、やはりこういう日常って楽しいな……）

太久郎はまだ知らない。
まだまだ魔法に関わることを。

でもこのひと時がいつまでも続くことを願って。

太久郎の日常は続いていく。

太久郎、なのは、フェイト達の物語はここで一旦終わりを告げる。

3人の日常がいつまでも続くように願って。

3人の物語はいつまでも――――――

――――――fin

日常（デイリー）（後書き）

２１話目です
そして最終回です！

今回は

・時空管理局登場
・フェイトの真実などの後処理
・３人のその後

……終わりましたね
いや本当感慨深いものがありますね
完成させると

しかし今回は…

ユーノ「ちょっと待てぇぇぇ！！」

おう！？
どうした…

ユーノ「僕の出番は！？」

いや本当すまない…
書いてる途中も思ったんだがね…
書いてたら「あれ？これユーノ出番別に入れなくても大丈夫じゃね？」ってなってしまって省いてしまった…

別に嫌ってないんだがね…

ユーノ「そ、そんな…」

うん、今度番外編のときでも出すよ
優先的に

さて今回最終回でしたが…
最終回はとくに無茶な展開だったと自分でも思っています
ですが…これしか思いつかなかったんですよ…
ええ…
やっぱり戻るなら管理局の力はいるだろうと思ってましたから
あと主人公がフェイトの兄になるのも最初から決まってましたw
アルフはついでです（エ

最終回は無茶な展開が多かったのでここはどうだったの？などの質問があれば可能な限り返答したいと思います
たぶん重要なことは全部書いたと思うのですが…

とにかく今回で完成しました
帰還にして6ヶ月くらい
皆様ここまで長いことお付き合いありがとうございました
22話と短い作品でしたが感想・意見等本当励みになり嬉しかったです

よくまあこんな自己満足な作品よく応援してくれたなと思いますw
あっ、あとどうせ最終回ですのでPVとか発表しときますね

これ投稿したときにはまだ２１話までのＰＶですがｗ

ＰＶ　５４，３２３アクセス
ユニーク　１０，１８２人

マジっすか！？

まさか５万と１万を超えるとは…
本当読者の皆様には感謝しきれないです

では本当今までありがとうございました
次出会うのはたぶん来年ですね
番外編か新しい連載、短編でまた会いましょう
本当ありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8079t/

二人の魔法少女が異世界入り

2011年12月13日06時45分発行